
魔法少女リリカルなのはAs ' ライト

kahiko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA's ライト

【Nコード】

N5297U

【作者名】

kahiko

【あらすじ】

この物語は、高町なのはが任務でロストギアの情報がここらあたりにあるということを知り、空を飛んでいたところ

それを見た少年火月が走って少女を追いかけるとそこには化け物がそして少年の新たな物語が今はじまある。

第1話 少女との出会い（前書き）

この物語をかくのは初めてです。

たぶん変だと思いますが読んでください

第1話 少女との出会い

「は、どうして、こんなに暇なんだ？」

「俺に聞くなよ」

「だよな」

呑気に学校の屋上でどろどろとサボっている俺と俺の友達の龍

まあ龍はもう少ししたら教室に戻るんだけど

あっというまに、キンコーンカーンコーン

「それじゃ俺もどるな」

「おう、迎え頼むわ」

「おう」

俺は再び寝っ転がり空を見る。なんど見てもそれが青いなー

「本当に面白い事ないかなー」

とそれを見上げていると

「……………!?!?」

空を少女と男のが飛んでいた。しかも辺がなんか変な色に変わった。

「なんだ？　しかも女の子が空を飛んでたよ！？」

どこをみても綺麗な青空ではなくなっていた

ともかく俺はその少女を追いかけることにした。

<なのは視点>

「ねえ、ユーノ君、こちらへんだよね？」

「うん、だけど反応はないね」

「それじゃ、戻ろっか？」

「そうだね」

そしてユーノは、艦長に連絡をしていた。

「うーん、なんでここらでロストギアの事がでたのかな？」

そのまま飛んで山の中を降りると

「ん？　なにこれ」

それは小さい光る塊だった

そして、なのはの頭のなかでこれが反応したのではと思い、ユ一
ノのところに行こうとした時だ

光の塊が光その中から化け物が出てきた。

「え!?!」

「なのは!」

<火月視点>

「うーん、確かここらへんだったような?」

道を歩いていると

ドカーンッ!

と何かが爆発した音が聞こえたのでそちらに走った、

「なんだなんだ!」

走ってその場に行くと、そこには少女と少年が戦っていた、

「なんだあの化け物!」

そしてなのはは、火月の存在に築く。

「ユーノ君、人がいる！」

「え！？」

少年が俺の方を向く。

「そんな結界を貼ったのになんで？」

ユーノは少年の魔力に築く。

(彼、凄いな。ってそんなことを考えてる暇はない)

「すげー」

火月は関心しながらパンを食べていた。馬鹿だこいつ(ナレーターです)

「そこの君速く逃げて」

「あ、はい」

俺は走ってその場を逃げた瞬間、化け物が触手で俺の足をつかまれ、木におもつきり投げられた。

ガン

俺は木に直撃した

「くそっ」

変な音とともに俺は気絶する。

「君！　なのは！」

「うん」

魔力を集中する。なのは

「デイベイン・シュート！」

ドンッ！

爆発とともに化け物が消える。

「君！　君！　仕方ない。なのは家に連れて帰ろう。手当てしないと」

「うん」

そのままなのはの家に、向かった。

第1話 少女との出会い（後書き）

次回 第2話 なんなのこの人たち

第2話この人たちなんなの（前書き）

うん、難しハヤテの口癖とフェイトの口癖

第2話この人たちなんなの

「ユーノ君、この人の腕にしているのって……」

「!？ それデバイスじゃないか！」

「やっぱりそーなの」

驚いているユーノとなのは、まさかこの地球にまだデバイスとこんな魔力をもったこがいるなんて

「なのは、そのことは家についてから」

「うん」

そしてなのは家に到着して、俺はなのはのベットに寝かされた。

「やっぱりフェイトちゃんとはやてちゃんに言った方がいいかな？」

「そうだね。連絡しよう」

ユーノ君が二人に連絡して、二人がやってくる。

「お邪魔するねなのは」

「お邪魔するでーなのはちゃん」

「うん。あがって」

その後フェイトとはやてが来てから、今日何が起きたのかを全て話
たなのは

「そんなことが……」

「大丈夫なんか？」

「うん、今は眠ってる。ほら」

扉を開けて、その人を見せる。

「この人なのは？」

「うん、まだ名前はわからないの」

それから3分後

「ん〜？ てか背中が痛い」

「あ！ 起きた！」

と目の前に少女の顔が

「わ！」

俺は驚きつい前に顔を動かしてしまった

「いた」

「いたっ」

俺とその少女は一緒にオデコに手をやる。

「大丈夫……なのは？」

「大丈夫か？」

「あ、はい」

「大丈夫だよ」

少し落ち着き、部屋を出てリビングへ

「君に少し質問したいんだけど？」

「あ、はい構いません」

てかなんで俺ここにいるの？

「まず君の名前を聞かせてほしんだけど？」

「あ、俺の名前は千川 火月です。呼ぶときは火月でお願いします」

「私の名前は、高町 なのは。なのはでいいよ」

「フェイト・T・ハラオウンです。フェイトでいいよ」

「八神・はやてや。はやてで構わんよ」

「僕の名前は、ユーノ・スクライアです。ユーノでいいよ」

そしてここから俺への質問が始まった。

「まず君がどうして、あそこにいたかだ？」

「えーと……友達と屋上で話したあと、友達が教室に帰ったから俺は、屋上で寝ていたら、いきなり空の色が変わって変だなと思ったら

そこにいる、なのはが空を飛んでいたの追いかけていきました」

「そう、それじゃ次の質問。どうして君はデバイスを持つてるの？」

.....

なにデバイスって？

「あ、あのデバイスって、なんですか？」

「……え!？」

「もしかしてデバイスを知らないの？」

「はい」

デバイスって、あのパソコンに付けるあれか？

「うーん、説明するより実際に体感したほうがわかるかな」

と言ってユーノは、ポッケから少年の異物を渡す

「はい。これ君のだよね」

「あ、はい。すみません。親がくれた大事なものなので」

「それをデバイスって言うんだよ」

これがデバイス？ 父さんがいなくなる前に貰ったものだけど

3 「これをどうすんですか？」

「知じにしたがって」

「あ、はい」

『ハローマスター』

しゃべった！ おもしれえ

腕輪が喋った。

「どうも」

『ジャケットと杖は自動で選んでよろしいでしょうかマスター？』

日本語だ。わかりやすいな

便利だな。でもジャケットと杖ってなに？ 俺杖より十剣の方がい

いんだけど

『イエス、マスター』

そして俺の服が消えて、なんかわけわからないジャケットと武器が出てきた。

俺の手には十剣だ。ジャケットは黒

「うわ！　なんだこれ」

「凄い！　まさかデバイスが答えるなんて」

「あーそれよりこの格好は？」

「あ、ごめんごめん。それは魔法を使うために必要なモノなんだ」

「………魔法？」

この人たちおかしいよ。魔法とか夢のお話だろ。

「それがデバイスだよ。そして魔法が使えるんだよ」

なのはの格好が変わっていた。

白い服だ。………綺麗だな

「魔法………」

「それじゃデバイスに願ってみて、元に戻るように」

「はい」

.....

服が元に戻った。

「ともかくまた明日にでもゆっくり話そう」

「はい」

え！？ また明日も話すの！？ この人たちにかかると危ないな

逃げよう

その後俺はなのはの家から出て家に帰った。

<なのは視点>

「彼、大丈夫やろうか？」

「大丈夫だよはやてちゃん」

「きっと彼は」

「そうだねなのは。それじゃ僕は局に帰るよ」

「うん。またねユーノ君」

「またなユーノはん」

「またねユーノ」

「うん」

ユーノはなのは達の前からいなくなった。

<火月視点>

「夢なのか？」

ほっぺを重つきり引つ張る

「痛てええええ」

はあく、面白いけど面白くないな

「なあお前の名前ってなんなんだ？」

『マスターが決めてください』

「うん……ライトだ」

『了解』

それからいろいろと聞いたあと

その後、俺は寝た。

第2話この人たちなんなの（後書き）

次回 魔法少女と鬼ごっこ

第3話 魔法少女と鬼ごっこ（前書き）

少しは修正出来たと思うような気がします。

感想ください

第3話 魔法少女と鬼ごっこ

あの少女たちと出会って1週間がたった。

いやたまためたんだ。実は俺次の日なのは家には行ってない。あの人たちに関わると危ない気がしたから

それでも俺はこのデバイスっていうものの力を借りて、イメージトレーニングをしたり、魔法の使い方とか覚えた。

まあこれを使うことがないことを祈る。

「なあ、最近お前おかしくないか？」

「いや、どこがおかしんだよ」

「……………いや見れば誰でも思うだろう」

火月の格好は、制服なのにフードがあるTシャツをきている。当たり前から見ればお前は不良だ。

なんでこいつ築かないかな。

「それで今日はどこで遊ぶんだ？」

「うーん……………ゲーセンでよくな」

「そうだな。じゃ格闘ゲームで俺が買ったらなんかおこれ」

「のつた！ その勝負」

そして俺と龍はゲームセンターに向かった。

<なのは視点>

「……………」

「……………」

「……………」

彼女ら三人は待っていた。火月が来るのを

だけど一週間の間、なのは達も待っていたわけではない。火月のことを調べていた。

「ほいなら探しに行くか？」

「そうだね」

「うん。見つけたら……………」

なのはの隣にいるフェイトが恐ろし事を考えていた。

そうフェイトは毎日、火月が来るのを待ち、弁当を作っていた。

それを今まで無視したのだ。火月は多分……になるんだろうな。

そんなことを考えているのはであった。

<火月視点>

ゲーセンでカチカチと格闘ゲームをしていた二人。

「くそっ！」

「火月、お前は裏技をしらない」

「え!？」

龍がコマンドをおして、変なビームが俺のキャラクターを内貫く。

「おい！ それありか？」

「ありだ」

自慢層にほざくな！ てかこれ裏技あったのかよ！

と再びカチカチとゲームをし始めた。

俺は少し疲れたので

「俺ジュース買いに行ってくるわ」

「おい、かけ忘れるな。俺ファンタな」

「へいへい」

あれはお前のイカサマだろ。くそ奴に鉄拳を食らわせたいぜ

と自販機に向かい。ファンタとコーラを買って戻る。

「ほい」

「お、さんきゅう」

と言って俺からジュースを受け取る。くそ毒でも入れてやりたい。

そして俺も自分の席に座る直前、ゲームセンターのドアを見ると

「……………ブウウウ!？」

あるものを見て俺は口からコーラを吹き出した。

「……………あんで、こんなところに」

しかも舌をかんだし。

「お前何吹き出してんだよ？」

ハンカチをだしゲームをふく。そして再びゲームセンターのドアを見る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

汗を流す火月。そう火月が見ている者は、彼女三人。高町・なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神・はやてである。

（まずいまずい。仕方がない。この場は裏口から逃げるしかない……
……ごめんなさい）

「おい龍、やっぱり違うところ行くつぜ」

「別にいいけど……なんで？」

「聞くな。裏から出るぞ」

「おう」

今日の火月、なんか変だ。

ゆっくり俺たちは裏口から出る。

なぜだから知らないが後ろから足音がする。しかも

（火月君、止まってよ）

とさっきから誰かの声が聞こえる。当然俺は声を出さない。

「なあ龍、お願いがあるんだけど？」

「なに？」

「後ろを振り返って、俺が言う髪的女性がいるか調べてくれ」

「お、おう」

そして龍は後ろ向く。

「確か……」

なのはとフェイトとはやての髪の色を思い出す。

「茶髪だったかな二人……そして金髪の女性いるか？」

「お前凄いな。確かにいるぞ」

マジかよ!？

さっきより汗を流す。

「ごめん俺用事思い出した。それじゃ」

と言って俺は走り出す。

「お、おい！ 火月」

あの馬鹿。なんで俺の名前をよぶんだよ。

俺はさらに走る速度をあげる。

<なのは視点>

「あれだよね？ 火月君」

「そうやな」

「……そうだね」

どンドンオーラを黒くするフェイト。恐ろしい

「なのはちゃん！ 対象が逃げた！」

「え！？」

「……」

フェイトは何も言わずに走り出した。

速！

と言っなのはとはやて

<火月視点>

やばいやばい。今現在走っています。

ただど後ろから俺を追いかけてくる足音が聞こえる。

思わず後ろを振り向く。

「……………フェイト!?!」

と言って思いっきり走る俺。

そうフェイトの足なんであんなに速いの。

もしかしたらデバイスの『ライト』を使うかもしれないな

商店街の方を走る事にした。なぜならここなら魔法は使えないからだ。……………多分

「お！ 火月君、ほら今日のオムスビ」

「あ、ありがとうおばちゃん」

とお礼を言っ走る。今度は

「お！ 火月君、ほらおかずに持って行きな！」

いろいろなおかずのセットをもらっ。

「ありがとうおじさん。今度お金払うな」

「いいから！ そんなこと気にすんな！」

走る俺。だけどいい加減疲れた。

だ途中でフェイトから隠れ、山のなかに逃げた。

<フェイト視点>

「確かこっちだったよね」

と言って走るフェイト。どんだけ火月に恨みを盛ってたんだ。

<なのは視点>

フェイトの足の速さに置いていかれていた。

「ほんま速いな〜。フェイトちゃんに火月君」

「あ……ははは」

なのはは笑うことしかできなかった。

「それじゃ、魔力でおうのが一番やな」

と言ってどこかの路地裏に入った。はやてとなのは。

そこで火月がどこにいるかを見つけ、フェイトにも連絡をした。

<火月視点>

草原のなかで倒れていた。

「疲れた。はあ、はあ……………」

風が吹き火月の汗を吹っ飛ばす。

「気持ちいい……………寝るか」

そのまま体を横に倒し、眠ろうとした火月だったが

（ん？ 雲でも出てきたか？）

（マスター危険です）

「は？」

俺は空に向けて目を開けた。

「……………」

再び俺は横になりイヤホンをつけて音楽を聞く。

<フェイト視点>

「…………火月、少し御仕置きね」

魔力を集中するフェイト

「プラズマ・バレット!!」

隣で見ているのはとはやて

<火月視点>

さっきからデバイスのライトが危険と言っけど無視した。

そして

(火月君、今すぐ逃げるのをすすめしようかな……………)

なのはの声だ。でもなんで

その言葉の後、俺の体にしびれが

「うわぁあああ!!」

シビレて動けなくなる火月。

イヤホンが取れ、声が聞こえた。

「御仕置き終了」

「……………御仕置きかよこれが

その五分後俺は目を覚ました。

「大丈夫？ 火月君」

なのはが隣にいた。

「大丈夫です。それよりさっきのなんですか？」

「……………フェイトちゃんの……………ね」

フェイトの……………なに？

「俺これからご飯なんで」

俺は商店街のおじちゃんとおばちゃんに買ったものを開ける。

「なんで……………四人分あるの」

「あ、美味しそうやな」

と言って口のなかに入れるはやて。おい！ きょうきが悪いぞ

「私もちょうだい」

なのはも口のなかに入れる。

「私ももらうね」

フェイトも口の中に入れる。

もしかしてこの事おじいちゃんとおばあちゃん。知っていた？

そんなわけないか。俺は飯を済ました後

「あ、それじゃ俺はこれで」

「うん。ほいならな」

「またね。火月君」

「またね。火月」

「おう。またな」

誰が会うかバカ

「つて、ちよつとまって！」

なのはに呼び止められる。

「なんですか？」

「前の話考えてくれた？」

「ええ、考えました。俺が中学卒業したらいいですよ」

「私たちと同じだね」

「そうやな」

「そうだねなのは」

「同じなのかよ」

「それじゃ、卒業までのお別れということじゃ」

「バイバイ、って違う。まだ話は終わってないの」

「帰れないか」

「火月君に私たちの船に来て欲しいの」

「………船!？」

「そんな馬鹿な。船があるわけないだろ。と思っていたが」

ところ変わって、時空船

「僕がこの艦の館長のクロノ。ハラオウンだ。よろしく」

「ハラオウン……ってまさか！ フェイトのお兄さん!?!」

「う、うん」

フェイトは頷く。

「それで君は覚悟を決めてここに来んだね」

「はい」

「それでは時空巡行艦アースラにようこそ。そして君もこれから時空管理局の為に働いてくれ」

「は、はい」

「ってなんで俺返事してんだろう。」

その後元いた場所に戻され。俺は家に帰る。

「それじゃ火月君、またね」

「またね火月」

「またね火月」

「……………いつかね」

と言って別れ家に帰る。

ドアを開けて自分の部屋のベットに横たわる。

どうして、俺、なのは、フェイト、はやてに関わってんだろ。

もしかして俺、惚れたのか？ うんなわけないか。 あったら怖いわ

そんなことを考えなら眠りについた。

第3話 魔法少女と鬼ごっこ（後書き）

次回 第4話 なんているんですか？

うーん、もう少し原作を呼んでやらなと難しいな。

良くなっていたら感想をお願いします。

第4話 なんているんですか？（前書き）

フェイトの口調難しい。誰かアドマイスください

第4話 なんているんですか？

翌日

朝目が覚めると俺はリビング向かった。

「今日の朝ご飯はなににしようかな？」

と考えながら階段を降りると

扉の向こうから、コンコンと音が聞こえる。

誰だ？ 母さんかな。でも母さんまだ帰ってこないし〜

まさか………幽霊？ それだと面白いな

さてとドアを俺は開け、リビングに入る。

「……………」

ドアを開けたその先には

「火」

バタンツッ！

即座にドアを閉めて二階に戻り、制服をきた。

よしこれで脱走の準備完了。

俺は窓から飛び出そうとした時だった

ガチッ！

俺の部屋のドアが開、一人の女性が入ってきた。

「火月、どこに行くの？」

なんですかその心地よく聞こえるはずの声なのに、めっちゃ怖い。

俺は大人しく後ろに体を向ける。

「なんでいるんですか？ フェイト」

「私たち決めたの」

「何をですか？」

「火月っていつもコンビニのお弁当でしょ。体に悪いからこれから私たちが一日交代で面倒みるから」

フェイトさんの言っている意味が理解できない火月。5分後、呑気に朝飯を食べていた火月。

はい。フェイトの手作りですね。美味しいです。

……って違う！

「お願いがあります」

「なに火月？」

「今すぐに帰れ。そして来るな」

「そんなこと言うと、泊り込みでくるよ」

「すみませんでした！ それじゃ俺学校に行くんで」

「あ、お弁当」

作ってくれたんだ嬉しいな。

……喜んでいいんだよな

「ありがとうフェイト」

「う、うん」

その後途中まで一緒に歩き、フェイトは途中でなのは達と合流して学校に向かった。

無論俺もダッシュで向かった。

学校の門前。

先生が門をしめようとしていた。ここはジャンプだ。

「うりゃあああ」

見事にキレにジャンプ。

「お前火月か？」

「ええ、はい」

驚いた顔で見ていた先生。そして教室に向かった。

「龍、おは」

「よう。お前が教室にくるなんて珍しいな」

「いや、ちょっとね」

「なんか良いことでも会ったか？」

「あるか」

即答の返事を返す。授業が始まった。

火月は真面目に教科書とシャープンを出して授業のことをノートに書いていた。

全員驚いた顔で見ていた。そりゃそうだ。あいつがまともに授業うけるなんて、めったにないからな。

「それで授業を終わります」

そして昼休みが来た。

「火月、今日も購買か？」

「いや、俺は弁当あるからいいや」

「……………弁当だと!？」

教室のみんながいきなり声をあげた。

「なんだよ俺が弁当持つてきちゃいけないのかよ？」

「お前が持つてくるなんて中学1年以來だな」

「そいやーそうだな」

ともかくフェイトが作った弁当を開ける。凄くカラフルだ。

てか、美味そうだ。後で何かお礼をしないとな

「おー、火月それお前が作ったのか？」

「……………はい！俺が作った」

誤魔化さないと

「なんで敬語になってんの」

俺は龍の話を見殺しして、弁当を食い始めた。

パクパクと弁当を口の中に入れていく。

なんで妙に卵焼きが美味しく感じるんだろう。

「あー美味しかった。ごちそうさま」

今日は学校は昼までなのであとは掃除をして帰るだけ

掃除をしてホームルームがやってきた。

やはり空は青いな。って見てるとさ門にさ女性がさ俺をさ見てるんだ。しかも見覚えのある顔だんだ

「誰かが火月のことを呼んでるぞ」

全員は窓を開けて、俺の名前を読んでいる奴の顔を見る。

「すげーめっちゃ美人」

「あの制服。どこのだろう」

「………火月」

「先生、俺先に帰るわ」

「おう。わかった」

みんなはもしかして………火月の恋人なの!!!!

って声を上げていた。一つ言いますが違いますよ。

「フェイト、なんでここにいるの？」

「だから言ったでしょ。一日交代で火月の面倒を見るねって」

「これもそれに入っていたんだ。迎えにくるときは連絡してー」

「それじゃ帰ろうか火月」

「ああ」

なにこのカップルみたいなの。やめて欲しい。

街中を二人で歩いているとき、前からガラの悪い奴らが来てさ

「ねね、俺たちといいことして遊ばない」

「.....」

フェイト無言

「あのう、これからデートなんでやめてもらえますか？」

なにがデートだ。俺は馬鹿か

「あーん、お前ぶっ飛ばすぞこらあ！...！」

(マスター右からきます)

今の声はライト。俺は右からくると言われたので、カウンターでそいつをぶっ飛ばした。

「あ！・・・逃げよう。フェイト行くぞ」

「うん」

てかさっきまでなんで無言だったんだ？

「火月、私の家に来て。魔法で教えることまだ沢山あるから」

「うん。わかった」

途中でクレープを買って帰りながら食べた。これってデザートなの？

そんなわけない。

<ハラオウン家>

「ただいま」

「お邪魔します」

部屋のどこからも返事がない。あれ？ クロノは？

「フェイト」

「なに？」

「えくと、クロノは？」

「仕事で管理局にいる」

「それでなのはとはやては？」

「宿題終わらせたらくるって」

それまで二人きり。きついな。

でもフェイトと二人きりは嬉しいかも。なんてね

「どこまで魔法教えて貰った？」

「えくと、射撃だけ……かな」

「そう。目を閉じて」

俺は目を閉じて、ライトにイメージトレーニングを発動させる。

相変わらず、すげー。

「それじゃまず私と戦う」

「………本当に」

「本当に………」

「………はい」

そして俺とフェイトの戦いが始まった。

第4話 なんているんですか？（後書き）

次回 第5話イメージトレーニング。

勝てるか！！！！！！！！！！ と叫ぶ火月であった

第5話 戦いとボコボコ(前書き)

変だと思いますが読んでください。

第5話 戦いとボロボロ

「はぁー！」

「くっ！」

剣と剣がぶつかり合う。お互いに魔力を集中する。

「フォトン・ランサーマルチショット！」

「ブレイク・ショット！」

お互いの魔力がぶつかり合うが

「まだまだだね。火月」

後ろに回り込まれ俺の負け。これで10敗だ。

てかフェイト強すぎるだろ！

「お疲れ様、火月」

「お疲れ様、てかフェイト強すぎないか？」

「普通だよ。私よりもなのはの方が強いよ」

なのはがフェイトよりも強い。戦うのはやめよう。

俺新たる決意をした。

「まだこないな。なのはとはやて」

「そうだね。お茶にする？」

「うん」

机に座りフェイトと一緒にお茶を飲む。

これがうまい。今までコンビニのお茶ばっかだったからな。

「宿題は？」

「………ありますが俺はやらない」

この言葉を言った瞬間。

「私が見てあげるからやろっ・ね」

「はい」

カバンからプリントとノートを出し。始めた。

.....

.....

カキカキ

「終わった」

ちょうどその時だった。

ピンポン

「はい」

『フェイトちゃん、来たよ』

「上がってなのは、はやて」

二人は上がってきた。

「おー、勉強しとったんかいな」

「まあしろと言われたので……でも終わりました」

「フェイトちゃん、どこまで火月君に教えたの？」

「接近戦くらいかな」

「今度は私な」

今度の俺の相手は、八神 はやてだ。

勝てる気しねえ

「それじゃ目を閉じて」

俺はゆっくり目を閉じるとそこには、青いそらと海だ。

『それじゃ火月君、初めて』

「はい」

俺は両手に十剣を構えて、接近モードの剣に変える。

そのままはやてに突撃をしかける。

「動きがみえみえや」

「え!?!」

向の魔力が集中していた。しかもそれが

「ラグナロック・ブレイカー!!!」

と同時にとてつもないデカイ! 魔法が使われ俺吹っ飛ば。もちろ
ん。負けました。

「.....なんだよ今の!?!」

「私の魔法、ラグナロック・ブレイカーって言うんや」

勝てない。無理だ。さらに次は

「今度は私なの」

「あ……はははは」

もういいや、イメージトレーニングが開始された直後

「火月君、全力全開……スターライト・ブレイカー!!!」

今度はなのはの魔力砲が飛んできた。

もちろん直撃負けました。

「勝てるか!!! お前ら強すぎだ!」

「訓練したら少しはよくなるって」

はやて様、俺一勝すら勝てない気がするよ。訓練しても

まあでも勝ちたいからやるけどね。なのはとフェイトとはやてをボコボコいつかしてやるぞ。

たぶん永遠に無理だと思うけど。

「何時まで訓練するの?」

「うん、夜に9時まででいいよねなのは、はやて」

「」「うん」

俺用事あるんだけど……ないけど。ゲームしたりゲームしたりしないといけないのに

用事とは言わないな。

「始めよっか火月」

またフェイト……さっきは手加減していたな。俺も全力で戦う。

残念ながらそれから2時間したけど俺は一勝すら勝てなかった。

「疲れた……」

「お疲れ様火月」

「それじゃ俺帰るわ」

「うん」

先にはやてとなのは家に帰った。

俺も家に帰る。

家に到着

「疲れた」

本当に強すぎる。さすがSSランクなだけはある。

俺もライトの力を使ってなのは達のことを調べていた。

さとして俺も寝るか

イメージトレーニングをしながら眠りに着いた。

第5話 戦いとボコボコ（後書き）

難しいな口調

第6話 ロストロギアとロストギア（前書き）

これを読んでいる人は、ロストギアってなにと思いますが、それはこのストーリーを作るために必要なものなので。

後なのは、フェイト、はやての口調とかアドバイスをいただけると助かります

第6話 ロストロギアとロストギア

翌日朝目を覚ました俺はランニングにでた。

イメージトレーニングでも体力は使うからな。

ランニングを終わり。家に着いてリビングを覗くと………やはりいた。

「今日のはやて………か」

「おかえり」

「あ、うん」

「朝飯できてるで、食べよ」

「いただきます」

昨日と同じく朝飯を食べて学校に行く準備をする。

「はい、これ弁当」

「ありがとうはやて」

弁当を鞆にいれて家を出て、途中でなのはとフェイトと合流。俺は無論走って学校に向かった。

昨日と同じく門を飛び越え教室にはいり授業を受ける。

「それじゃ……この問題を火月君、やってもらおう」

カキカキ

と黒板に書いていく。まあここは昨日フェイトに教えて貰ったからな

「お！ 全問正解だ」

みんなは火月を驚いた目で見ていた。

まあ火月が勉強を真面目にしているのだからな……え!?

俺は席に戻り授業を受ける。昼休み

「火月、購買か？」

「いや、今日も弁当あるからいいや」

「もしかして昨日来てた女の子と関係あるのか？」

みんなも俺に近づき聞く。

「……関係ない」

嘘です

みんなは、なんだーと言って俺から離れる。今日も来るんだろうな

弁当を開けて食べる。美味しいですね。

「火月、明らかにそれお前が作ったものではないな」

「!? 俺が作ったに決まってる」

汗を流しながら言う。

「だってお前、料理できるけど。弁当作らんじゃん」

こいつ鋭いな。

「……作るんだ」

嘘をとつすぞ俺は

昼休みが終わり。午後の授業始まり

<
>

すべての授業を終えた後ホーミングの時間

俺は門を見る。予想道理にはやてが立っていた。

「昨日とは違う女の子がいるぞ」

「しかも昨日とは違うけど美人だ！」

「誰を待ってんだろう?」

皆は俺を見る。

「なんで俺なんだよ!」

「火月なわけないか……」

ホームルームが終わり門に行く俺

当然男子が群がっていた。

「はやて、行くぞ」

「待ってねえな」

男どもは言った。やはり火月かと

「今日そのまま家に帰っていいの?」

「今日は私の家に行く」

今日ははやての家かよ!?

まさかとは思っけど

「フェイトとなのは、くるよね?」

「うん、今向かっているみたい」

きついな。本当にきつい

八神家到着

「上がった」

「お邪魔しまーす」

「はやて、お帰り」

「ただいま。ヴィータ」

「はやて、そいつ誰？」

「新しく時空管理局に入った火月」

「初めまして、千川 火月です」

「よろしく、後はやてに手を出したら殺すぞ」

「誰が手を出すか！」

少し落ち着きリビングに向かった。

「それじゃ始める」

目を閉じて俺はイメージトレーニングを開始する。

・・・・・・・・・・・・・・・・30分後

「はやく、手加減しろ!!!」

「火月は動きが見え見えや」

昨日イメージトレーニングずつとしてたのに

「火月に私らの仕事でなにをするか教えとこうかな」

「はい」

それからロストログアのことを沢山教えられた。危険なものだということはわかった。

「前なのはが言ってたロストギアってなに？」

「古代の羽車・・・・・・・・」

古代の羽車ってあの風車とかに使われてるあれ？

「ロストギアの事は私らもよく知らんのよ」

「はあく、ま、わかりました」

「明日は土曜日、なのはちゃんが火月を迎えに行くからな」

「はい。明日どこか行くの？」

「本局に行く」

「……時空管理局のあれだね。わかります

「わかりました」

それからなのはたちが来て俺は再びボコボコにされた。

もう勝てない。その後だ俺はもう終わりかと思っていたが

「今度はあたしが相手だ」

「……ヴィータさん何を言っているのかわからない。

もしかして俺と戦うと言う意味でしょうか？

「速く目を閉じる」

「……はい」

ヴィータと俺の戦い

「アイゼン!」

と言うとカートリッジが転送され、なんかアイゼンがでかくなった。

「……ありかよ!」

と叫んだがそのままハンマーの下敷きになら俺の負け

「っ、強い」

「お前弱いな」

「うるさい!」

俺、勝ちたいな。

(マスターは勝ちを望みますか?)

(当たり前だ)

(マスターがそれを望むなら)

ん? ライトなんか変だな

「もう一度私とだね火月君」

「あ……ははは、またなのは」

再び俺はなのはと戦う

「いくよ! デイヴァイン・シュート!」

俺もつかさず

「cross mirageークロス・ミラージュ」

連続で銃から発射される魔力だん。俺はそれをなのはが打った魔力だんとぶつける

(ライト、これお前がやったのか?)

『イエス、マスターが勝ちを望むなら』

「いくよ火月君、全力全開、スターライト」

俺も魔力を集中。昨日イメージトレーニングで覚えた俺の必殺技

「なのは、俺も全力で！ クロス・ドライブ」

「「ブレイカー!!」」

お互いの魔力の弾がぶつかる。

「くっ」

なのはの魔力弾は強い。

そのまま俺は飛ばされ俺の負けとなる。

「負けた」

「でもすごいよ！ 火月君」

「昨日なのはの技とフェイトとはやての技を見て作ったんだけどな」

皆驚いた顔で俺を見ていた。

「まあ今日は疲れたから俺帰るわ」

「きいつけてな」

「おう。また明日な。フェイト、なのは、はやて」

「うん。またね。明日は迎えに行くからね」

「またね火月」

そして俺は三人の前から姿を消し家に帰る

<なのは視点>

「やっぱり火月君、凄いよ」

「そうだねなのは」

「もしかしたら火月は直ぐに出動になるかもな」

「だね」

楽しそうに笑うなのは。新しい仕事仲間が出来たから嬉しんだろう。

<火月視点>

「父さん、俺、なのは達とやって行けそつだよ」

写真の父さんに話をかけて眠りに着いた。

第6話 ロストログアとロストギア（後書き）

次回 ここが時空管理局なの

第7話 ここが時空管理局なの(前書き)

展開がもしかして……早すぎたかな？

見てください。

第7話 ここが時空管理局なの

朝6時に目を覚まし俺はランニングに出た。

この頃俺良くランニングに出るな。まあ毎日が楽しいからいいか
町内を一週して戻る。

だいぶ体力は着いたと思うけどそれでも走る。

それから20分後家に到着。

「ただいま」

って誰もいないか。まだ朝の6時30分だからな

汗がだくなので風呂にはいった。

<なの視点>

「え〜と、確かここなの？ レイジング・ハート」

『イエス』

家の鍵を開けてなかにはいるなのは。

「お邪魔しまーす」

と言っ中に入った直後

俺は風呂から上がり下とズボンを入れてドアを開けた。

ちようどなのはが来ていた。

「なのは、速いな」

「火月君こそ……お風呂に入ってたの？」

「うん。ランニングして汗ベトベトだったから」

「それじゃ朝ごはん作るね」

「うん」

俺は二階に上がり上の服を来てリビングに降りた。

扉を開けてリビングに入ると今も料理をしていたなのはの姿。

「もう少し待ってね」

「……うん」

俺は目を閉じてイメージトレーニングを開始する。

『マスター、今日は射撃と格闘の両方を教えます』

「頼む」

俺とライトの訓練が始まった。

「くっ……っ……！」

『マスター上です』

つかさず上に向けて魔力弾を撃つ。その魔力弾を破壊する。

次は左からくるのは

「ライト、ツヴァイモード」

『了解』

銃のモードが剣に変わり

俺はその魔力を斬る。

「これで終わりか？」

『今日の訓練終了です』

ちょうどそのときなのは、「ご飯も完成。

「火月君、ご飯出来たよ」

「こっちもちょうど終わったから」

ソファアを離れ机の椅子に座る。

「腹減った。いただきます」

バクバクと口のなかに入れていく俺

「そんなに急ぐとつまりよ」

はい。つまりました。直ぐにお茶を一気に飲み干す。

「死ぬかと思った」

それから朝飯を食い終わり、家を出た

現在はフェイトの家に向かっている。

「なのは、クロノに会いたいんだけど………?」

「クロノ君は今仕事だからダメなの」

仕事か………クロノよ俺はお前の妹が家に来るのを認めて欲しくないんだけど、なのはたちもね

そしてフェイトの家に着きなかに入る。

「お邪魔します」

「お邪魔します」

家のなかに入ると……女の人が座っていた

「あら、なのはさん。そちらの彼は？」

「あ、千川 火月です」

「私はリンディ ハラオウンです。よろしく」

ハラオウン……!?

「フェイトのお母さん!？」

「そうだけど……」

フェイトの母若い！ まさかフェイトが綺麗なのは知ってたけど
母親がここまで綺麗だとわかる気がする。

「なのは、火月、おはよ」

「おはよフェイトちゃん」

「おはよフェイト」

なのはは二階に上がる俺はリビングでリンディさんとお話をする。

「火月くんは、どっちが好みなの？」

「……え!？」

「だからどっちが好みなの？」

「考えたことないですね。それは……」

「そう……」

「でも俺は二人とも好きですよ」

二人ねーと言うリンディさん。からかわないでください。俺は手元にあるコーヒーを飲む。

それからリンディさんと世間話や、昔話をした。

俺とリンディさんは気が合いそうだ。

「駅前のこー茶美味しいですよ」

「それじゃ今度行こうかしら」

と言うリンディさん。そこでフェイトの着替えが終わって下に降りてきた。

「母さん、火月となに話してたの？」

そこで思いもよらない答えを出したリンディさん

「え？ え〜と、なのはとフェイトのどっちと付き合いたいかとかね」

笑いながら言うリンディさん。

いらんこと言うんじゃない

「それで私となのはどっちを選んだの？」

「だから俺はどっちも好きだって言ったんだ」

二人は顔を赤くする。

「それよりフェイトちゃん。速く行こ」

「うん」

あれ？ はやてはと聞くと

今日は学校の用事でこれないらしい。

俺はフェイトの近くに行く。そしてフェイトが

「時空管理局」

と言つと光に包まれた。

<時空管理局>

「……………」

「ここが管理局なの」

なのはが口にしたところが管理局

俺の感想……でか!!

「さあこっちだよ火月」

俺はフェイトの手をとり立ち上がる。そしてなのはとフェイトの後ろを着いていく。

「あ！なのは、フェイト、火月」

「ユーノ君」

俺たちの目の前に現れたのはユーノだ。

「火月、その格好だとなんか変だね」

「ん？」

俺の格好とみんなの格好は以上に違う。

「あ……はははは」

「仕方ないか……ライト、セットアップ」

『スタンバイ』

俺の服装が魔導服に変わる。真っ黒だ

「これならいいか？」

「うん、少しはましになった」

「それじゃ火月改めて、管理局によつこそ。火月の階級はなのとは同じだよ」

「なのはと同じか……」

それでも俺となのはの大きなさはうまらない。

「それじゃまず火月のデバイスをシャーリに見てもらいに行こうか」

「はい」

「それじゃまたね火月君、ユーノ君」

「またね。なのは、フェイト」

「おう」

「またね」

そしてなのは達と別れた。俺はユーノに着いていく

「それでシャーリって誰？」

「あーデバイスの開発と改良をしてくれる人」

「ふうん」

どンドン奥に進んで行くと、ひとつの扉にたどり着く。

シューインーと扉が開く。

どんだけ科学進んでんだ？

「シャーリー火月のデバイス見て欲しいんだけど……」

「あ、ユーノくん、でそちらがれの……」

「千川 火月です。よろしくお願いします」

「よろしく。早速だけどデバイス見せてもらえる？」

「はい」

俺はシャーリーにデバイスを渡す。

ユーノは用事があるから少し離れると言ってどこかに行った。

「……………」

モニターを見ながらカチカチと進めるシャーリー。

「……………火月くん」

「はい。なんですか？」

「デバイスをいじったことある？」

「いえ、ありません」

シャーリーは再びカチカチと俺のデバイスを調べる。

そして5分後、ユーノが戻ってきてシャーリーと何かを話していた。話が終わり俺のところへ戻ってくる二人

「火月、このデバイスは誰から貰ったの？」

「父さんがいなくなる前に貰ったんです」

「そう……どこかで小さいギアみたいな物拾わなかった？」

「ん？……！そいやなのは達に出会う前のことなんですけど、俺は母さんと一緒に買い物に出て、その時だったかな。俺事故にあっただんです」

「事故？」

「はい。トラックに跳ねられて意識が……確か……朦朧としたとき俺が転がったところに光るギアみたいなものが落ちていたのでそれをぎゅっと握り締めて死にたくない願ったら、傷が治ってました。」

再びユーノとシャーリーが話をした。

「いい火月。君のデバイスにロストギアが入っているんだ」

「……………え!?!」

「ロストギアは古代の遺産で、それが火月のデバイスに入ってる」

「しかもこれは火月くん専用のデバイスになってるの」

シャーリーもユーノの後に続いて喋った。

俺のデバイスにロストギア? それじゃなのは達が探しているのは……………俺のデバイスか

「そのデバイスは、差し上げます。父さんの物ですし」

「……………残念だけどそれはできない。君がそのデバイスを捨てたら君は死ぬ」

「嘘……………でしょ。ユーノ」

無口になるユーノ。

「完全に火月くんとロストギアが融合しているから……………もう」

「それと君のお父さんは……………こちらの世界で亡くなっていた」

「父さんが……………死んでる? やっぱりそうだったんだ」

「やっぱりって……………?」

「父さんがいなくなって3年たった時です。俺の元にそれが送られて来たんです。手紙と一緒に……」

「手紙？」

それから俺は手紙の内容を教えた。

『火月へ、ごめんな誕生日と小学校のお祝いできなくて、お前からプレゼントだ。それは特別な物だから大事にしてくれ。私が後1年で帰って来なかったなら、死んだと思ってくれ。最後に母さんによろしく。火月おめでとう。千川 源氏』

「この手紙を読んでからずっとそれを大事にしてきました。父さんがまさかこちらの世界出身だったなんて」

「火月、これは君が持つものなんだ。だから返すよ」

「ありがとう」

受け取る。それからポケットに入れる。

「それじゃ俺はなのは達のところに行きます。ユーノもお仕事ありそうだし」

「うん。またね火月」

「ああ」

研究施設を出て管理局の中を歩く。

「確かこつちだよな」

道を進んで行くと大きな町があった。

てかここどこだよ。大きな町。大きなビル。

「でかいな。俺の世界と全然違う」

ひたすら歩いた。

今築けばここは管理局ではない。築くのが遅すぎた。

ドカーンツと爆発音がした。

俺は直ぐに走って向かった。

「なんだ!？」

大きな穴が空いている。

「下がってください。危ないので」

「時空管理局の者です。中を見たいのですが？」

「はい。どうぞまだ誰もなかには入れてません」

よし俺の発仕事だ。勝手にしていいのかな？

「ライト! セットアップ」

『スタンバイ』

これでよし。俺は下に降りて行った。

<なのは視点>

『緊急緊急、街中で大きな爆発と同時に大きな穴が空いたという情報がいりました。出動願います』

「フェイトちゃん」

「うん」

ふたりはレイジング・ハートとバルディッシュを装備。

飛んで街中に行く。

<火月視点>

下にどんどん降りていく。

「……なんだここ？」

大きな洞窟みたいな感じのものが俺の目の前に

「ん？ うわっ！」

レーザーが飛んできた。

そこにはロボット？ これは………確かたのは達が言っていた物だよな

再びレーザーが飛んでくる。

俺は銃を構えて魔力を集中。

「cross・mirage・クロス・ミラーージュ！」

連続で発射された俺の魔力弾はロボットのレーザーとぶつかる。

そのまま俺はトリガーを引いて、ロボを破壊に係る。

「くっ！ 魔力が消えた？」

なのは達の言葉を思い出しながら戦う。

魔力を固める。だけど今の俺はできない。なら

俺は銃を二つ構えて同じところに二発打ち込む。

「これで！ クロス・ブラスト！」

同じ場所に同じ魔力弾を打ち込めば

ドカンッ！

ロボが爆発した。

「よし、てかこんなところになんかあるのか？」

辺を見渡す。けど何も無い。

俺は上に上がる。

上がるとそこには、ちょうどなのはとフェイトが着いていた。

「火月君！ なにしてるの？」

「そっだよ火月」

「下見てきた。でもなにもいなかったぞ」

「危険なんだから無茶はダメ」

「はい」

怒られてしまいました。

「本当になにもなかったの？」

フェイトは心配そうに俺に言う。

「ロボがいたから壊した」

「……………ガジェットがいたの!？」

「うん。だけど壊した。まずかったか？」

「うんうん。すごいよ火月君」

「凄い」

何がすごいのか俺には分からない。

そんなにすごいことか？ イメージトレーニングと対して変わらな
いけどな

「それじゃ帰る。火月君、フェイトちゃん」

「うん」

その後レポートを提出させられてから元の世界に戻った。

現在フェイトの家

「疲れた。さすがにきつい」

「お疲れ様、ご飯作るからまってて、なのは、火月」

「う……………ん」

「うん」

疲れが溜まりすぎて俺はどんどん眠くんなって、1分もしないうちに眠った。

「火月、眠ったね」

「そうだね。今日は大活躍だったからね」

「なのは、どうする？」

「今日は泊まっていていい、フェイトちゃん？」

「いいよ。ぜんぜん」

「それじゃ私お父さんとお母さんに電話してくるね」

フェイトは小さい声で

「火月、今日は本当にお疲れ様」

そして俺はなのはとフェイトにベッドまで動かされた。

そうフェイトのベッドに、俺は何も知らないまま眠った。

第7話 ここが時空管理局なの(後書き)

次回 第8話 清々しいお目覚め

うーん、このAsが終わったらこのままStrikersに繋げて
行った方がいいのかな？

まあ今はこのAsに集中するんでよろしく。

それでは次回にまた会いましょう

第8話 いい目覚め!?(前書き)

こんな感じでいいのかな?

第8話 いい目覚め!?

朝目が覚めると

「……………んんんん?？」

なんか手のひらにいい感触が……………!?

俺はすぐさま起きて隣をみた。そこには

「……………なのは!?! フェイト!?!」

「うん、もう朝?」

「朝にや……………の」

フェイトさっきのは可愛い。だけどそんなことを言っている場合じゃない!

なのはが目を覚ます。てかなんで下着なんだ!?

「俺はベットから飛び出し直ぐに部屋を出る」

ドアの向こうからは

『火月君、どうしたの?』

「どうしたのじゃない。なんで俺がお前らと寝てんだ!?! しかも

なのは俺男！ お・と・こだぞ。下着で寝る奴がどこにいる」

「火月が昨日寝てたから……別に見られても気にしないよ」

「気にしろ！ だったらクロノの部屋に寝かせるとか考えなかったのか!？」

「あ、そうだね」

馬鹿だ！ 俺の中学にいるやつが同じ目にあつたらなのは達を襲うぞ。

俺は襲わないよ。

そんなごちゃごちゃで俺の一日が始まる。こいつらの頭の中を改良したい。

俺は先に起きてリビングに向かいイメージトレーニングを始めた。

「ライト、今日の訓練は厳しく頼む」

『イエス、マスター』

ガジェット10機が出てきた。いつもならガジェット1〜2の数だけど今日は10だ。

気お引き締めていかないとやられる。

「行くぞ!」

<なのは視点>

「なのは、起きて朝だよ」

フェイトは二度寝したなのはをお越している。

「うーん、フェイトちゃんもう食べられないよ」

なんて常識な寝言を言っているんだ。この子は全く

なのはを起こすのは後にしたフェイト。リビングに降りてくる。

「か」

現在イメージトレーニングをしているため火月は聞こえない。いや聞こえるけど聞こえない。

トレーニングに集中するため。

フェイトはやはり小さい声で

「火月、頑張れ……」

それから30分後……

「なのは、起きろ」

現在俺千川 火月がなのはをお越している。だけど起きない。

「うーん、火月君。また私の勝ちなの……」

こいつ俺が負けているところの夢を見てんのか……？ ムカ
つとキタ俺は

なら考えがある。

俺はなのはの耳元で

「正面からフェイトのプラズマ・ランサー後ろから、火月のクロス・ブレイカーが発射されました。マスターではよけられません」

と言つと

「それなら！ ……あれ？」

「やっと……つて！」

なんでこいつ下着なんだよ！ 俺が起きたときに言ったよな俺。

ズボンをかスカートをはけと

「速く下に降りてこいなのは。フェイトの朝飯全部俺が食うぞ」

「あ、食べる！ 食べるから」

俺はそのまま下に降りる。

「やっと起きたよ。少し待てば来ると思うよ」

「そう。それじゃ先に座ってて」

「いいよ。俺は手伝うよ」

そして皿を並べたり盛り付けの手伝いをした。

それから直ぐになのはが降りてきて

「ごめん」

「いいから座って」

「速く座れよ」

「うん」

なのはが降りてきて俺達はフェイトの朝食をいただいた。

朝飯を食べながらフェイトに俺は質問をした。

「フェイト、昨日なぜ俺をお前たちと一緒に寝かせた？」

「ん？ え〜とね………なんとなくだよ」

なにさらっと笑顔で言ってんだこの人は………。

「クロノの部屋で寝かせることは考えなかったのか？」

「……………そうだったね」

と可愛い声で言われても困る。色々と困るんだ俺が。

朝が大変だったんだぞ。と心の中でフェイトに呟いた。

朝飯を取り終わり俺は再びイメージトレーニングをしようとしたら

「火月、昨日のままでしょ？ だからお風呂入ってきなよ」

「あ、じゃあ一旦帰るわ」

「ここの使いなよ」

「……………いや、家に帰るよ俺……………」

「いいからお風呂使って・ね」

「はい」

俺は大人しくハラオウン家のお風呂を借りた。

なんでだろうか俺の家の何倍凄いなんだ。

「気持ちいい」

呑気にお風呂に入ってます。デバイスは外に置いてある。

シャーリーが言っていたことを思い出す俺。

『いい。あなたとロストギアは融合して一つになってるの』
ある程度距離から俺とデバイスを離すと俺は死ぬか……。こ
れは覚悟をしとかなきゃな

俺は風呂のお湯に顔を付ける。

この俺が今いられるのは、ロストギアのおかげ。

「ありがとなロストギア」

俺は小さい声でロストギアに語りかけた

10分後……。風呂をあがり着替える。クロノの着替え、今は
使ってないらしい

「ありがとフェイト」

「うん」

「あれ？　なのはは？」

「はやてを誘いに行ったよ」

「フェイト、俺と格闘戦してくれ」

「私はいいけど……。どこですなの？」

俺はフェイトと家を出て近くの公園に向かった。

「ここで格闘戦しよう」

「いいね。ここなら」

俺とフェイトは構える。

「はあ……」

<なのは視点>

現在はやての家の前にいるなのは。

「はやてちゃん。迎えに来たよ」

と呼んでも返事がない。

結局なのは心の会話をした。

(はやてちゃん、起きてる?)

(ん? なのはちゃん。どうしたん?)

(昨日約束したの忘れたの?)

(あー、ごめん。勉強に集中してたから)

そしてはやてが出てきて、なのはとはやてはハラオウン家に向かった。

<火月視点>

バシッ！ バシユ！

お互いに蹴ったり殴ったりしている。だけどよける。

「火月、少し動きが単純すぎる」

バンツ！

と背おいなげされあっけなく俺の負け。

「くそー！ なんで俺負けるんだ？」

「火月はね。動きが毎回同じだから直ぐにわかるんだよ」

「……前にも誰かに言われた気がする」

「うふふふ」

笑われたよ俺。でもフェイトの笑う顔可愛いな。普通に

「そろそろ帰るか？」

「うん」

俺とフェイトもハラオウン家に向かった。

この時本当の戦いが俺を待っていることを今はまだ知らない。

第8話 いい目覚め!?(後書き)

次回 緊急出勤

20話くらいでAsを終了してそこからStrikersにつなげたいと思います。

このAsの小説からStrikersは読めるので、よろしく。

それではまた明日。

第9話緊急出動（前書き）

．．．．．このままではお気に入り登録とポイントが少ない．．．．．

これはあの手を打つしかないと思い

第9話緊急出動

俺とフェイトとなのはとはやては現在なぜだか知らないが……
トランプをしている。

なぜしているのかわからない。そうなぜだ？ 誰か教えてくれ

「スリーカード」

はやては自慢げに言う。お馬鹿だ

「うん……1ペア」

フェイト、ずっと負けてるな。

「フォーカードなの」

相変わらず強い出目だな。なのは

だけど貴様らは知らない。俺がイカサマをしていることに

「ロイヤルストレートフラッシュ！」

「えー！！」

三人は同時に叫び俺に近づく。てか近づくな！

「火月、もしかしてイカサマしてる？」

フェイト目鋭いな。だが

「なんでだよ。カードシャッフルしたのフェイトだろ」

「そうだね」

笑顔で返すな。

「火月はもしかしたらもともと手元にトランプを持っていたとかやないんか？」

はやて恐るべき。その通りだ。だけど俺は嘘を貫く

「そんな証拠どこにもないだろ」

「そ、それは……」

「もう一回しよ。それでわからよ」

(なのはお前は馬鹿だな。俺はイカサマはいつだってしてるんだぜ)

そう俺は自分の心の中でつぶやいてしまった。現在俺はずっとなのはとコンタクトをしていたんだ。

「ねえ、火月君。クロノ君の部屋で少し話があるんだけど？」

なのは急に俺に話を持ちかけてきた。俺はふつ々に

「うん」

と言っただけなのはに着いていく。

<火月視点>

「それで火月君。どういう感じでイカサマをしているのか聞かせて」
目が目が怖い。

「わかってるんだよ。火月君がイカサマをしたの、自分の中で呟いたよね」

バレてる。汗を流す俺。

「そつだ俺フエイトとデートするんだつた!？」

なんだこのとつさの嘘は？

あほか俺は

「それはないね。これから私たち管理局に行くんだから、それも嘘だね」

とんでもないミスをおかしたらしいな俺。

「イカサマを今すぐやめるならいたぶるのはやめてあげるよ」

おいおい……可愛い顔でなんて怖いことを言ってるんだ。

皆さんののを怒らせると怖いですよ。これからは気お付けないからね。てっ俺誰に喋ってるの？

「はい！」

俺となのはの話終わり。一回に戻る

「ごめん。火月君のデバイスのことで聞きたい事あったから……」

「そうなんだなのは。速く次で最後」

「さあ火月も座りんさい」

「……はい」

その最後のゲーム明らかにこいつらイカサマをしたなという現実になった。

「『ロイヤルストレートフラッシュ！』」

「お前らもイカサマしてるじゃないか！」

うふふふと笑いながら俺を見ていた。そのバトルを終えたあと管理局に向かった。

現在管理局前

何をしているかって、それはそのタコ殴りされてます。

「グハッ！」

イメージトレーニング中です。

そして負けました。俺を応援してるみんなごめん勝てん。

「それじゃ私は先に戻らせてもらっわ。そんじゃまたなのはちゃん。フェイトちゃん。火月」

いつの間にか呼び捨てになっただ。

「ああ」

「うん」

「またね」

と言って俺たちの前から姿を消したはやて。

「それじゃ訓練続けようか？」

「そうだな」

と言って訓練をしようとしたとき

ウィンウィンと何かがなっている。

『ガジェットと思われる機械が発見。ただちに魔導士は向かってください』

「それって!!!」

「うん」

「行かなきゃ」

俺たち三人は同時にセットアップして、目的の場所に飛んだ。

空を飛ぶのはこれで二回目だ。けどどなんか違和感が感じる。

「火月、しっかり着いてきね」

「うん」

俺はなのはとフェイトの後ろを着いていく。

それから10分後目的の場所に到着

「管理局の高町なのです」

「同じくフェイトTハラオウンです」

「同じでいいのかな……？ 千川火月です」

「あれです」

明らかにそれは見覚えのあるものだった。

どつからどう見ても俺が前戦ったガジェットと同じだった。

「それじゃいくよ」

「了解」

三人で飛び立ちガジェットの元に飛ぶ

……ドカンッ

どんどんガジェットが破壊されていく。

(なのは達……こんな戦いになれてるなんて、凄いな。これが本当の戦い)

現在俺は後ろで見ているだけ

それから20分、ガジェットは全て破壊され無事任務終了。

「これで最後だね」

「そうだねなのは」

お前らどんだけ強いんだ

「それじゃ帰ろ」

「「うん」」

三人で一緒に手をつないで帰った。そんなわけあるか！

フェイトの転送魔法で俺は自分の家まで送って貰った。

「じゃな、フェイト、なのは。もうお世話してくるな」

「うん。またね火月」

「またなの火月君」

ふっ完璧に俺は言っただけだった。

「それはダメ！」

と言って帰っていった。もう誰かあの人たちに女の子というものを教えてあげてと心の中で考えた。

次回 海だ！夏だ！水着だ！

第9話緊急出勤（後書き）

次回 夏だ！ 海だ！ 水着だ！

予告 火月くんお待ちせ、

ごめん着替えるのに時間かかって

ごめんな火月。これ似合うか？

……皆ふつうに可愛くないか？

と思う火月であった。

第10話(前書き)

こんな感じかな。もう少し伸ばした方がいいかな

第10話

あれから数週間がたち夏がやってきた。

現在俺は何をしているかというところ

「あちいつく。死ぬ」

俺の部屋はクーラーがないため、窓を開けるしかないのだが・・・
・窓を開けても生温い風流れ込んでくるのでしめる。

だから俺は蒸し焼き状態だ。今日は訓練もおやすみで何をしてもOKらしい。だから俺は

「プールに行こう！」

俺は水着の準備をして家の玄関を開ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

バタンツ！

即座にドアを閉めて俺は裏口から家を出た。玄関の目の前にはリン
ディさんとその仲間たちがいた。

(こんな時くらいほっといてくれ)

見つからないように出たと思ったが

「火月、おはよ。いい天気だね」

なぜフェイトが裏口にいるんだ。

「……いい天気だね」

「私たちこれから海に行くけど一緒にくる？」

「いや、俺は……いい。遠慮しとくよ」

「なんで？ 用事でもあるの？」

考える俺。フェイトを乗り切れば俺はプールに行ける。

「え〜と、部活があるから……」

これを言うと

「それはないよね火月君。だって火月君は部活入ってないよね」

後ろから現れたのは……なのは。

これじゃ逃げるのはダメか。仕方ない家にもどるか

「今日は体のぐわいが悪いから遠慮しとくよ」

「それもないです。火月さんの体は健康そのものです」

「だそうや。なのはちゃん、フェイトちゃん。」

はやてと小さい女の子が現れた。

「なんだその豆粒みたいに小さい人は？」

「そいやー紹介がまだだった」

「私の名前はリーフォースです」

小さいのにご丁寧に。って小さすぎるわ！！

「それじゃ火月君。海に行けるよね」

なんだその目の奥にあるその黒い影は

「わかったよ。行けばいいんだろ。行けば！」

「じゃあ出発」

車に乗り込み海に出発した。車が俺の部屋より涼しくて最高だった。

なんで俺は女だらけの中に男の俺一人だけなんだ。クロノかユーノを要求する。

と心の中で呼んでも答えてはくれない。

<クロノ視点>

「はっ、はっくしょん！ 風でもひいたか？」

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

火月の念がクロノに届いたらしい

取り合えず戻して火月視点

「あちいゝ死ぬゝ」

現在パラソルを開いて寝転がっている。フェイトとなのはとはやてとリンデイさんの着替えを待っているのだ。

それでも暑い。

「マジで暑い」

現在の温度32。だ。暑すぎて死ぬ。普通海に来ら涼しいとかあるだろ。なのになんだこの暑さは。

もう限界家に帰ってねたい。

「ごめん。おまたせ火月」

と聞こえる声の方に視線を向ける。

「……！ フェイト」

「うん。私だよ」

・・・黒の水着はルール違反だろ。てか可愛すぎるだろ。モデルになれるぞこれ

しかもビキニ。うおおお水着バンザイ！

「フェイトちゃん置いていかないでよ」

と言って現れたのはなのはとはやてとリンディさんだ。

なのはは白のビキニ。はやてはフェイトとは違う黒のビキニ。リンディさんは青のビキニ。

これはおかしい。なんでモデルにならないの？ と考える俺。

「泳いっしょ！」

とはやてが言っしょ

「「「おっしょ！」」」

となのはとリンディさんは声をあげる。

子供だな

「「「うん」」」

俺とフェイトは頷く

「それじゃ俺向の島まで泳いでくるから」

「あ、私も行く」

「気お付けてね」

俺とフェイトは競争をすることにした。

「よし。負けたら相手に命令、なんでもだ」

「いいよ。負けるつもりはないから」

言ったなフェイトよ。俺は負けん。このルールで俺の家に来るのをやめてもらんだ！

そのためなら俺はどんな敵とでも戦うさ。

「行くぞフェイト。よーい」

「「どん」」

と合図と共に泳ぎに入る俺とフェイト。

水が気持ちよすぎて泳ぐのが嫌になった。だけど

クロールで進む。

バシャバシャと水を蹴りながら前に進む。無論フェイトは追い越した。

（火月、速いな　だけど私も）

フェイトも速度をあげた。

俺とフェイトは現在同じ位置にいる。

（くっそ！　フェイトが追いつくなんて。これでもかなり鍛えたぞ俺）

そのまま二人ともクロールをした状態で島に到着。

「「ゴール」」

同時にゴールしてしまった。

「引き分けだね。はあはあ」

「そうだな。はあはあ」

<　なのは視点　>

そのころなのは達は

「いくよー！」

バシン！

とボールがはやてに近づくと

「まだまだ」

と言ってボールをリンディに返す

「その程度では」

さらにボールをなのはに返す

3人ともビーチバレーをしていた。だけどリーンフォースはどこに？

ZZZ車の中でお休み中です。

<火月視点>

「フェイト、俺この島散歩してから帰る」

「あ、私も散歩する」

俺とフェイトは見知らぬ島を歩く。

なんかジャングルみたいだなこれ。てかこれって二人きり

なんか恥ずかしくなってきた。と考えたときにフェイトが転びそうになったので

俺がフェイトの下敷きになる。

「ぎゃ」

現在フェイトが俺の上にいる状態。

「フェイト」

「な、なに？」

胸が、胸が密着していてこまるのだが

「いつ、いや、その……戻らないか？」

「そうだね」

気まずいから戻る。

再びレースをする。

「今度こそ勝つ！」

「私も負けない」

スタートしてなのは達が待つ砂浜へ

<なのは視点>

「フェイトちゃん達おそいな」

「ご飯の時間なのに」

「こまったわねー」

と言っていると海の方こうから二人の人影がこちらに向かってる。

「あれ……火月君とフェイトちゃん？」

「そっやな」

「そっみたいね」

負けられない戦いをしている二人。

残念ながらここも二人ともゴール。

「さすがにきつい」

「だね」

「二人ともお疲れ」

「あ、ああ」

「お昼食べよ」

手を差し伸べられ立つ。パラソルのところに戻り焼きそばを食べる。
普通だよな

「あれ……リーンフォースは？」

「あ！ いけないご飯あげないと」

はやてはご飯をもつて車に向かった。

「うまい」

「美味しいね」

「そういえば二人ともどこでなにをしてたの？」

「ブウー！」

とジュースをはいてしまった。

「すまん。えーと……ずっと泳いでいたよなフェイト」

「う、うん。泳いでた」

カバーをしあいながら俺たちは打質した。

それからみんな泳いだり、スイカ割りしたり

いろいろした後家に帰るのかとおもいきや

「それじゃ今日はここに泊まりましょう」

目の前にあるのは旅館。

「……は？」

と俺は思った。

第10話（後書き）

次回 旅館と言えば覗きだろ

予告 龍なんでお前たちがここに

ん、火月お前か。えーとな旅館に泊まるうという話でな。

お前にも連絡したんだぞ。

ここまでです。ここから先は次回で46！

すみませんネットが止まっているので更新遅れます。

第11話 旅館と言えば覗きだらう

「……………」

現在俺はとんでもない状況に陥っている。

そうリンディさんは俺と別々にするのがめんどくさくて、一緒の部屋にしたんだ。

これは非常にまずい。

「あのー俺自分で新しく部屋借りてきます」

「……なんで？」

ピピピその三人、リンディさんとはやてとなのは。常識なことを言うな。

男性と女性が泊まっていいのは、恋人または結婚している人だけだ。
……………多分

それでも俺は男だ。だから常識を貫く。

「そろそろ露天風呂に行かない？」

「あー、いいね。行こうか」

はやてとリンディさんの意思が一つになった。

「私も行く」

なのはも賛成らしい。

「じゃ私も」

フェイトも賛成らしい。

「行ってらっしゃい」

みんなを見送ったあと俺はデバイスを取り出し

「ライト、俺はお前しか話す相手がないんだ」

『マスター困ります』

ライト、お前だけは俺の見方なんだな。ともかくだ売店行ってお菓子買ってこよ。

俺は部屋を出て売店にGO

そのころなのは達は

<
>

「綺麗だね」

「そつやなー」

「そうだね」

「そうね」

みんなで露天風呂にはいり月を見ていた。

これがまたリンディさんとフェイトがナイスバデなんだよこれが。
なのは……胸がちよっと

はやては普通だな。てかなんでこんな話してんだよ俺。

戻って火月視点

お菓子を選んで買っているところ

「ん？ 火月か？」

「ん？ 龍お前どうしてここに？」

お菓子を買って終わりそれを口にいられた状態で話す。

「てかお前電話したのになんででないんだよ？」

「え、すまん電話家に忘れた」

朝は忙しくて忘れてた。

「それよりお前一人か？」

「いや……その……」

言えない。言ったらこいつら俺になにするかわからん。
女性と一緒に来てるなんて言えない。

「あら、火月くん。まだお風呂入ってなかったの？」

その場にちょうどリンディさんがやってきた。

なんでこんな時に

「火月……どういうことだ？」

「それより火月くん、なのはさん達はまだお風呂にいるから」

「はい……はあ、」

俺は誰と来ているのか全て話した。

「ハーレムじゃん!」

「大声で言うな」

「それより風呂行こうぜ」

「なんで」

「もちろん風呂と言ったら覗きだろ」

こいつの頭を修理したいです。誰か道具を貸してください。

「誰が覗くか！ 死ぬは」

覗けば多分、スターライト・ブレイカーとラグナロック・ブレイカーとプラズマ・ザンバーの餌食にあう。

だから俺はいかん

「お前一人で行け」

「仕方ねえな。後で感想を教えてやるよ」

教えなくて結構です。

俺は龍と別れ部屋に戻る。

ガラガラ>

「もぐもぐ……」

ポテチを食いながら扉を開けると目の前には、なのはとフェイトとはやてがいた。

あれ、なのは達風呂じゃなかったけ？

「お前ら何時帰っていたんだ？」

「火月達が話している間に戻ってきたよ」

よかった。・・・なんで俺は

「火月君、ずるい！ 私にもお菓子ちょうだい」

「飯を食え。後で菓子を食え」

「「「「はい「「「」

てかなんでフェイトとはやてとリンディさんが一緒に返事をしてんだ！？

自分で買いにいけよ。俺のお菓子がなくなるだろ

皆が夜ごはんを食べている間俺はイメージトレーニングをした。

俺は先にご飯をいただいたので、トレーニング中です。

だけど

「火月君、今日は訓練禁止ね」

「なんで？」

「疲れを取るために来てるのに、溜めてどつするの？」

「わかった。訓練はしない」

だけどトレーニングはするぞ。ただの屁理屈だ

「ともかく俺は風呂に入ってくる」

「混浴の方に来てね」

「……絶対に行かない。しかもここ混浴あったのかよ!？」

「あつたよ」

フェイトさん、即答で返すのやめていただけると助かります。

しかもなんでみんな入る気にいるんだ。おバカかお前は？ だいたい風呂は男女一緒に入ってはいけません。

俺はなんで心の中で呟いているんだ？

「嫌だ。俺は普通に風呂に入ってくる」

「来なかったら腕の骨一本ね。それと毎日朝起こすときプラズマ

」

おいおい、この人たちおかしいだろ。まずフェイトよお前はどんだけ俺を壊したんだ？

しかも骨一本って

「行きます。行かせていただきます」

この頃フェイトの性格が少し変わった気がするの俺だけか？

気のせいだな

風呂の用意をして混浴に向かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺入りたくない」

目の前には混浴と書いてある。けどどうしてだか地獄の門番がいるんだ。

俺には見える。ここを通れば確実に地獄に行くと俺の直感が言っている。

どうする？ 行かないと腕一本だし・・・・・・・・

「ええい、考えてもしかたないわ！」

ガラガラと扉を開けてまず普通に風呂に浸かった。

それから俺は混浴の所に行く。後ろに悪魔がいるぞ多分。

再び混浴の風呂に浸かる。気持ちい。疲れが取れる最高だ。

「お待たせ火月」

と言って現れたのがフェイト・ハラオウンだ。なんで？

「誰も待ってない。来たから俺帰るわ」

「待つて、まだ体洗ってない」

何をフェイトは言ってるんだ？

「自分で洗うからいい」

「洗うの」

視線が確実に俺の右腕一本と言った。誰か女をフェイトに教える。

「はい」

俺弱

現在背中を流してもらっている。

「痒いところはない？」

「ない」

さっきから胸が俺の背中にあたって困るのだが……色々と

背中を流し終わり

「それじゃ用も済んだし俺は自分の風呂に」

「お待たせフェイトちゃん」

なのはが現れた。

俺の中でのドラクが始まった。

- 1 攻撃
- 2 魔法
- 3 アイテム
- 4 逃げる

もちろん逃げる。

ゆっくりと混浴から出ようとすると

「どこに行くの火月君？」

バレたか……

「いや上がるのかな……と」

「頭洗うからそこに座って」

「はい」

男は無力だ。

頭洗ってもらうと眠たくなるんだよね。

「なのは」

「ん？なに？」

「お前は男というものを知っているか？」

「男????? うん火月君のことですよ」

わかってない。こいつ天然か!? フェイトと天然だな。

頭を洗い終わり風呂に浸かる。

「ふー」

「気持ちいいね」

「うん」

「ああ」

呑気に風呂にはいつている俺。後3秒後に俺は築く

「……………あ！俺なんでここで呑気に風呂に入ってたんだ？馬鹿か俺は」

「それじゃそろそろ上がるわ」

「私たちも上がるうかフェイトちゃん」

「そうだね」

俺は男子の着替え室に向かう。

頭を拭きながら考える。

「おかしい……………あいつらはおかしすぎてる」

『なにがですか？ マスター』

「ライト、やはり喋られるのはお前しかいない」

『……………困ります』

ライトと大変みたいだな。

それから着替えを終わり部屋に一人で戻る。その前にお菓子を买买。

「これとこれとこれ、ください」

「お会計は1500円になります」

買いすぎた。袋がいっぱいになるまで買いました。

部屋に戻るとまっ先にはやてが

「私の分のお菓子买买てきてくれたんや。ありがとな」

誰も买买てきてないけど……まあいちゃ

俺は袋の中からお菓子を取り出しはやてにあげる。

俺も布団に寝つ転がりお菓子を食べる。それから5分後、なのは達がやってきた。

「火月、一緒に帰ろつて言つたよね」

「……………」

俺は何か嫌な予感がしたため即座にお菓子を安全な場所に退避。

「っ痛い！」

足が足が折れる。誰かフェイトを止める

ってあいつら呑気に見てやがる。仕方ないここは嘘を着いて

「フェイト」

「なに？」

「俺はお前のことが……」

「私のことが……なに？」

ダメだこの嘘を着くと後で殺される。

「俺はお前にマッサージをしてもらいたい」

ドテンと皆が転んだ。なにを期待してたんだ？

「うん」

俺はマッサージしてもらいその後眠りに付く。

つけるか！ 女4人と同じ場所で眠る？ 出来るわけなからう。

しかも内は、美少女と人妻だぞ。眠れるわけなからうて

俺は目を閉じてイメージトレーニングに入った。

これなら眠れる。

「行くぞライト」

『了解』

「火月君、訓練禁止だよ」

横からのイメージトレーニングでのスターライト・ブレイカーが飛んできて俺のイメージが全て破壊された。

なのはの奴めまだ起きていたか？

まあいいこれで眠れる。

それから5分後眠りについた。

第11話 旅館と言えば覗きだろっ(後書き)

うまく書けない!!

次回 夏休みは管理局で過ごしそう

第12話 夏休みは管理局で過ごしそう！

旅行から帰ってきて、家に到着。無論俺は俺の家にな

「疲れた。無駄に……」

旅行の思い出をゴミ箱にいれた俺はすべての記憶をゴミ箱に捨てる。

「忘れる。忘れないといけない！ よし忘れた」

俺は今の間に家を出て買い物に行こうと俺は思う。

じゃないと後でなのはとフェイトとはやてが来ると言っていたからな

「行ってくるよ父さん」

玄関を開け、外に出る。

日差しが眩しい。走ってその場から退避。

「ここらなら大丈夫だろう」

ショッピングモールに入る。

自動ドアが開き中に入る。もちろん行く場所は決まっている。

ゲーセンだ！

エスカレーターに乗って三階へ

<なのは視点>

「火月君、あそぼー」

だが

「……………」

無言。

「いないのかな？」

「でも、私たち後で来るって言ったよね？　なのは、はやて」

「うん」

ここにいる三人の考えが一つになった。

（（逃げた……………））

逃がすわけないでしょ。火月

<火月視点>

「くそっ！」

マルチーブラツ をしている。明らかに難しー
ここに来れば、これをするべし。

「ふー、本題の買い物しとくかな」

ゲームをやめて2階に向かい。服を買う。

俺の家って服買ってくれないんだよな……。

だからこうして俺が買いに来ている。

「ん？」

俺の視界に入ってきたのは……黒い服。

金髪ロングの髪の毛……。

俺は咄嗟に物影に隠れる。

(あいつらがいるわけがない！ どこに行くか教えてないぞ)

まさかフェイトが此処にいたとは、予想外だ。

携帯を開いていた。

「……まずい！ これ以上来て貰うは無理だ」

物影に隠れながら俺はフェイトに近づく。

そしてフードを被り、フェイトの携帯めがけて一直線にダッシュした。

俺は手を伸ばし携帯を奪い。

「え!?!」

俺はそのまま走り出す。

「あ、逃がさない」

フェイトも走って追いかける。

(どっつする? どっつする? ーの場合はどっつする?)

俺の頭がフルで回転をする。

俺の視界に入ってくるもの全て利用するべし

「.....トイレ!」

トイレに行けば入ってこれまい。

角を間借りトイレの中に入る。

「もう逃げ道はないよ」

奥から声が聞こえる。怖い

入ってこれない。しめしめ作戦同利だ。

「今すぐ出てくれば、許してあげるよ」

知るか！ 俺はでないぞ

すると

「仕方ないね」

普通に入ってきた

!!!!

「どっやって………?」

「今掃除中という看板だよ」

可愛く言っな!

「くそっ!」

「ねー火月、私たち後で行くって言ったよね。しかも私の携帯奪つてなにがしたいの?」

バレてるー。言い訳を考えると。

「実は………フェイトの電番とメールアドレス知らないから………だからこうやれば、聞けるかなって………」

なんて変な嘘だ!!

さすがにこれはバレたか？

「そうだったんだ。ごめんね。築かなくて」

え 天然バンザイ。

それからメールアドレスと電話番号を聞いて、トイレを後にする。

「じゃあな。フエイト」

「うん。またね」

と言ってその場をダッシュで逃げる。

バシッ

俺の体に光の輪っかが、おいこれって

「逃がさない」

可愛く言われても説得力ねえ。

「パフェ食べたいなー」

俺は言う。

「はい」

と言って俺を店まで連行する。

店の中に入り、注文を決めた。

「あ、すみません。俺バナナパフェ」

「私も」

「かしこまりました」

いい加減これはずしてもよくな

「いい加減外してくれ。もう逃げないから」

「逃げたら………プラズマね」

「………はい」

男なんと無力だ。

PS を取り出しゲームを開始する。

「火月、なにしてるの？」

「ん？ ただのゲームだから」

「そう………なんだ」

太鼓の達 というゲームなんだけど

音楽も聞けていいよね。

フェイトが俺の隣にやってくる。

「フェイトさん、なんでこちらに……?」

「え、どんなものかなーって」

カチカチと俺はボタンを浸らすら押すが、隣りのフェイトが気にな
ってしょうがない。

「……やる?」

「いいの?」

「うん」

それからやり方を説明した。

カチカチとフェイトもボタンを押す。

なんで普通にクリアしてんだ? 全部ハイスコアだし

「面白いね」

「……うん。それよりなのは達は……?」

「あ!」

もしかして、呼んでないか

フェイトは直ぐに携帯を開きなのは達を呼ぶ。

当然俺はパフェを食べている。

「うまいな。これ」

「そつだね」

と言って俺とフェイトはパフェを食べる。するとウエートレスさんが

「今カップル写真を撮ってるんですけど、いいですか？」

俺はつい

「ん？ あ、はい」

返事をしてしまった。

「それでは、お互いに食べさせてください」

恥ずかしい！ けど……やるしかない……。

「フェイト……ごめん」

「火月……」

お互いに口を開け、スプーンで取ったアイスを食べさせる。

食べたところで写真の取る音が聞こえた。

「ありがとございました。これは記念に飾られます」

マジかよ!?! まあ俺の知り合いは誰もこないだろう

「あ、はい」

なのは達を待つて20分……こない

「フェイト、遅くないかなのは達」

「……あ! 下で待ち合わせしてた!?!」

馬鹿だ————!!!!!!

<なのは視点>

「はやてちゃん」

「なんやーなのはちゃん」

「フェイトちゃんってここに待つてるって言ってたよね」

「あ、そうやな」

暑い中二人とも待つていた。

<火月視点>

「急げ！」

「うん」

パフェを食べ終わり、自販機で飲み物を買った。正面玄関に向かう。

そこではふたりの女性が今にも死にそうな顔をしていた。

「なのは！ はやて！」

「あ、火月……君にフェイ……トちゃん、どこに……
行ってたの？」

「いいから飲み物飲め」

「……おおきに」

「……ありがとう」

それから5分落ち着くと

「どこに行っていたのか聞かせて」

「えーと、それは……その」

「私たちから逃げたの……？」

まずい。明らかにまずい。この状況は逃げるが勝ちかも知れないな。
どうする……。

……！ そうだこの手で逃げよう

「あ、あれはなんだ！」

大きく指を上上げる。それにつられて三人は上を見る。

俺はその間にダッシュで逃げる。

我ながらいい作戦だった。俺はそのまま前を見て走る。

(これ以上俺の生活に入り込んで欲しくない。俺が自由にゲームも
出来やしねえ)

家に着いて中に入り自分の部屋に向かう。

階段を一步また一步と上がり、自分の部屋の入口に立つ。

「やった。これでゲームが——」

ドアを開けると少女三人が怖い顔して待っていた。

俺は咄嗟にドアを閉めて、その場を立ち去ろうとするが

『火月君、なんで逃げるの？』

なのはの声が頭の中から聞こえる。

『ゲームしたいから逃げる』

『みんなでしようよ』

『そうだな』

俺は呑気にもう一度扉を開けて中に入る。

「火月」

俺は大量に汗を流す。後ろから

「ふえ、フエイト!!」

「逃げたら、わかってるよね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そうか、俺今日死ぬんだ。

と思っただがフエイトは何もしなかった。

「火月君、荷物まとめて欲しいな」

「は？」

「夏休みは管理局で過ごすの」

「え？ え　　！！」

と言ったけど結局荷物を纏められ、現在本局にいるのです。

俺の夏休みが一瞬にしてチリとなった。これが男の道というやつか？ 明らかに違うな。

「出勤もないし、休もうか？」

「そうだね」

「うん」

「それで……さ、俺の部屋はど……」

「ん？　ここだけ」

………！？　今なのは、………
てませんでしたか？

「そんな冗談な話あるわけないだろ」

「嘘やない」

「本当だよ」

皆さん一緒に

「嘘だー　　ー！！」

第12話 夏休みは管理局で過ごしそう！（後書き）

次回 ロストギアのカ

第13話 ロストギアの方

翌目を覚ました俺は

「……………夢じゃ……………ない」

俺の左には……………フェイトがいます。俺はゆっくりベットから降りて

服を着替えて、部屋を出る。

「はあ」

ため息を付きながら歩いていると

「あ、シャーリー」

「火月くんもこれから朝飯？」

「はい」

俺と一緒に朝飯をとりに行く。部屋にいたら俺の煩惱が悪いことを考えるからな。

それから食堂に行き朝飯を取る。

「これおいしいね」

「そうですね」

俺的は普通だけど……。

それから5分後

「おはよ、火月、シャーリー」

「おはよ」「

フェイトが起きてきた。それに続きながらなのはとはやとリーン
フォースもやってきた。

朝飯を食べ終わり。みんなで話をしていた。

「ん？」

魔法通信。

「火月です」

『火月か、今すぐここに行ってくれ』

マップが表示される。

「って、クロノかよ！……遠いわ！」

『君が中学を卒業したらここに行ってもらおう』

雪山最高。んな訳があるか！

「わかりました。クロノ艦長」

笑いながら通信を切ったクロノ。

あやつめいつか見てろ。

「誰と通信してたの？」

「クロノ、これから行くところ出来たから行ってくるわ」

「え？ どこ」

「教えない」

俺は三人の前から姿を消す。

魔法は使っていいのかな？

「ライト、セットアップ」

俺の体が魔方陣に包まれ、服が変わる。手には銃剣状態のライト。

「ライト、ここまで全力で行くぞ」

「yes」

俺は空に舞う。

そこからどんどん加速して行く。後ろから誰かが付けているから

「振り切る。cross burst」

さらに俺の速度が加速する。

<なのは視点>

「火月の速度が上がったでなのはちゃん」

「え？」

目の前にいる火月がどんどん離れて行く。

「速い」

追いつけずに途中でストップ。

「速いな。火月」

「そうだね」

「火月、やっぱり凄い」

<火月視点>

なんとか振り切った火月は、どんどん加速しながら進む。

多分速度を上げても、着くのは3時間くらいかかる。

「ふうー、きついな」

進む事3時間ようやく見えてきた。

「ん、あれか！」

これって確か機動なんとかっていう奴だったけか？

下に降りて玄関に向かい、中に入る。

「あ、あの」

「なんでしょうか？」

正面にいた女性の人に声をかけた

「ここに行けって言われて来たんですけど……隊長さんはどこに……?」

「あ、ああ。君が、千川火月君でしょ」

「は、はい」

おー、俺の名前がここまで知られているとは、嬉しいぜ。

それからこの女性に案内をしてもらった。

ドアをノックして

「失礼します」

ドアを開けて中に入る。

「待っていたよ。千川 火月君」

「……男？」

「今私の事、男だと思ったでしょ」

「はい……」

「私は女ですからね。私の名前は、アステリカっていいいます。ここで刹羅の隊長してます」

（俺と同じ中学生？）

「あ、あの敬語使うの……俺苦手なんですけど……」

「別に敬語は使わなくて結構よ」

「ありがとう。アステリカ」

俺は咄嗟に名前で呼んでしまった。これはまずいか？

「名前で呼んでくれるんだ！ 嬉しいね」

「・・・・・・・・・・」

大丈夫か？ この隊長。アステリカ、よく見ると胸が普通に合った。すいませんでした。アステリカ隊長。

「俺の仕事ってなんですか？」

「私の遊び相手」

「・・・・・・・・・・は？」

今この人言っただけなら平気で言ったぞ。

クロノめ厄介なところで送ってくれたもんだな！ やはり奴には、毒入りのまんじゅうでも食べさせてやるのか？

「冗談よ。雪山で遭難している人の救助と時々雪山には遺跡がある。そのなかにロストロギアがあるからその回収」

「了解。アステリカって何歳？」

「私はねー、20よ！」

胸張って言われても、って20！ それにしても俺と同じ背ってかわいそう

「俺よりそうとう年上だな」

「そうだね。私お姉さんだよ。なんでも訊いて」

「それじゃ、帰っていいですか？」

「……………君、夏休み終わりまで帰れないよ」

「……………マジか!？」

「うん。もしかして知らなかった？」

「クロノのバカタレ!!！」

と俺は大声で叫んだ。

そのころ艦にいたクロノは

「ハッ、クシヨン！」

「クロノ艦長、風邪ですか？」

「……………多分、違う」

火月の怨念はここまで達していた。

<火月視点>

「アステリカ、俺の部屋は？」

「え？ 聞いてない？ ここだけど」

「……ここでも俺は……楽ができないのか？」

「いや違うアステリカは冗談を言っているんだ！　なのは達とは違うと信じていますよ。」

「冗談でしょ……？」

「うんうん。そこ荷物」

俺は隊長の部屋の隣にドアがあることに今築いた。

「……あの……一ついいですか？」

「なんでも訊いて」

「俺とアステリカの部屋は一緒じゃないですよね……？」

「……」

「なんでそこで無言になるの！　まさかこれはなのはの差し金か？」

「あ奴だったら俺は、海で泳ぐときに水着海にながしてやる！」

「まさかの！？」

「……うん」

「誰の指示だ！」

「だって火月って、女の子と一緒に寝るのが好きなんですよ？」

「誰だその情報元は？」

「知らない」

即答で返すな！ 99%なのは達だ。後はクロノか…………。

俺は女と一緒に寝たくないの！

「部屋」

と言った瞬間

「無理」

だから即登で返すな！

「わかりました」

男は無力だ。いや俺が無力なだけか…………。いつか復讐してやるぜ。

無理だと思っけど…………。

「それにしても暇ですね」

「だって雪山で事件って滅多に起きないもの」

「……………来るんじゃないかった」

「なにか言った？」

「いえ」

本当に暇だ。あれから7時間たったけど暇だ。もう夜の8時。

暇で暇でたまらん。

「そろそろ夜だしご飯食べようか？」

「そうですね」

俺とアステリカは立ち、飯を取りに行く。

食堂に行き飯を貰う前……………。

「君が新人の千川 火月くん？」

「あ、はい。そうです」

俺って有名人……………違う意味での

「君がか」

今思えば男性が見あたらぬ。途轍もなく嫌な予感がしたので訊いて見た。

「アステリカ？」

「どづしたの?」

「もしかして……ここって男性俺だけってことない……
・よね?」

「うん。そうだけど」

平気に返しやがった。女性大量の中に俺を一人ぶち込んだ奴出てこい!

ちよつと待てよ。それじゃ俺、今ハーレムってこと!? 龍よお前の夢は俺が叶えてやったぞ。

俺自身が嬉しくないわ!

「あ・ははは」

笑いが止まらないまま席に着く。

スプーンでおかずを掬い口に入れる。

「美味しい」

「でしょ」

自慢するな! お前が作った訳ではないだろ。

まあ、なのは達から開放されて俺は満足だけだな。特にフェイトから離れた事が一番嬉しい。

フェイトと一緒にいると99%死にけるからな。

<なのは視点>

「火月くん、大丈夫かな？」

「大丈夫だって、なのはちゃん」

「そうだよ。なのは、火月だってもう一人前の魔導士なんだから」

「そうだね」

少し安心するなのはだった。

「だけど、もし火月が夏休み終わっても帰って来ない場合」

そこからはなのは達は訊かなかった事にした。

<火月視点>

飯を食べ終わりみんなと話をして、大体の事はわかった。

現在アステリカの部屋（俺の部屋）。

「それじゃ火月君、おやすみ」

「うん。おやすみって言えるか！」

俺の隣にはアステリカ。そして現在下着の状態だ。

「なんで？」

「服を来てください!？」

「だって動きにくいんだもん」

「だだをこねない。俺男ですよ」

「わかってる。襲うときはきちんと言ってるね」

笑顔で返すな！ てか、言うこと間違えてますよ!!

「だれが襲うか！」

「なら私が襲う」

「.....」

それから10分無言が続き俺は

「寝るんで近づかないでください」

「冗談だよ」

「冗談に聞こえなかったぞ」

明らかにアステリカは俺で遊んでいるな。

「大丈夫10%が冗談だから」

まずい、アステリカは90%が本気だと言っている。

「半分以上本気じゃないですか!？」

「そうだね」

俺は少し以上にアステリカから離れると

アステリカも俺に近づいてくる。多分ずっとこれがつづくと思った俺は

止まり眠る。イメージトレーニングで眠る事にした。

「おい、火月君? 寝ちゃった?」

俺は眠りました。トレーニングの中でね。だけど声が聞こえる。

「襲つよ! いただき」

トレーニングを直ぐに中断した。

「まった! 何をする気だ!？」

「あ、起きてたんだ」

「当たり前だ。俺外で寝る」

俺は扉に近づくと、この部屋はドアが自動で開くはずなのに

「あれ？ 開かない……なんで？」

「私の認証が必要だからね」

はかったなアステリカ。仕方ないこれはフェイトかなのはで実験しようと思ってたけど

俺はアステリカに近づき押し倒す。

「きゃ！ なにを……」

「いいから速くその認証のしてくれ」

俺は顔をギリギリまで近づけた。

「……わかった」

扉が開くと同時に俺はダッシュして部屋を出た。

「あ!？」

今更築いたか愚かな娘よ。俺はな逃げるのだけは負けたことないぞ。すいません嘘です。フェイトとなのはとはやてが相手だと負けてしまいます。どうもすいませんでした。

「うわ!」

急に俺の体にリングが巻き付く。そうこれは、あれだな。

「くっ」

「逃がさない」

女は悪魔だ！ 俺の頭の中での女は暴力マンだ。

「わかった。諦める。疲れたから寝るよ」

「うん」

俺はベットに戻る眠る。

俺が眠った後

「火月君か……面白……」

俺を見ながら言うアステリカ。それは月の光に照らされてもっと可愛く見えていた。

翌日

俺は目を覚ました。

体をお越し隣を見ると

「……いない」

アステリカがないのだ。まだ朝の5:30なのに

俺は服を着替えて部屋を出ると、椅子に座って仕事をしていた。

「ありえない」

「私もちやんと仕事するよ!」

笑いながら俺は返す。

「早いね火月君」

「ああ、ランニングしに行くからな」

「雪山を……?」

忘れていた。ここは雪山だ。

「……………そうだった!!」

「トレーニングの場所行く?」

「それあるなら言えよ!」

俺はアステリカの後を着いていく。その時、俺は足を止め
辺にいる女の人に聞いた。

「あのう」

「なんででしょう?」

「部屋つて本当に空いてないんですか？」

「……………いえ、空いてますけど……………」

俺はニコニコしながらアステリカの後を追いかけた。

訓練場に着いた瞬間俺は

「ライト・セットアップ」

俺はセットアップした。

「アステリカ」

「なに？」

「部屋空いてるって聞いたけど」

「……………」

無言になり帰ろうとするアステリカ。こいつめ俺で遊んでいやがったな。

「さてと御仕置き時間ですよ隊長」

「あははは……………きや」

それから1時間かけて俺は隊長を痛めつけた。でも俺も痛めつけられたけど……………。

「それじゃ俺荷物上に持っていきますんで」

「うん……」

俺は荷物を持って二階に上がり部屋に荷物を置く。

それにしても雪山ってすることないな。本当に暇だ。

その時だ！ 俺のデバイスのライトが光始めた。

「なんだ？」

「マスター反応です」

「なんの？」

「ロストギアです」

ん？ ロストギアって俺のしかないんじゃないか……。いちを行って
みるか。

足って外に出た俺は

「さぶ！」

空を飛んでそのギアの反応があった場所まで飛ぶ。

「ここか？ ライト」

「イエス」

下に下りると遺跡があった。しかも扉が開いていた。

俺はそのまま扉の中に入り扉を閉じる。

ゆっくりと足音を立てずに奥に進んで行く。

「なんだ！？　ここ」

奥にはとてつもないくらい広い場所があった。

誰かの足音が聞こえる。

物影に隠れる。

「ここら変に確かに反応が合ったはずだが……………」

俺はライトを構えて飛び出す。

「誰だ！」

光が差し込み顔が見える。

「……………!?」

「見つけたぞ。我ロストギア」

こいつロストギアの事を知っている。我ロストギアと言っていた。

何者だこいつ……………。

「なぜロストギアの事を知っている」

「……………俺がロストギアだからだ」

「ふざけるな!!」

「ふざけてなどないさ。それより貴様がロストギアを持っていたとは、もう少しだけ貴様に貸してやろう」

そう言っつてそいつはどこかに消えた。

「待て！」

消えた時に確かに聞こえた。奴はこう言った。『貴様の星で待っている』と言った。

そいつが消えても俺は少しの間ここに立ち続けた。

それから1週間が経ち、夏休みもよいよ後1週間。

「火月、夏休み最後まで入ってもらうつもりだったけど……………本局から呼び出しよ」

「……………はい」

ここで教えてもらうことは教えてもらった。後は俺の実力であいつを倒す。そして最後に俺も……………。

「それじゃアステリカ隊長、みんなまた」

「またね」

と皆が言っただくれた。

刹羅のみんなはとっても優しくかった。てか、本局から呼び出して誰だよ!?

それから3時間かけて本局に到着。

「かづくん！」

と手を振りながら一人の女性が走ってくる。

「なのは、どうしたんだ？」

「速く！」

なのはに引っ張られて行くとそこに……

「かづくん、お誕生日おめでとう」

「火月、誕生日おめでとう」

「おめでとう」

……そういえば今日は俺の誕生日だったけ？

忘れてた。訓練に時間を使っていたんでカレンダー見るの忘れてた。

「いつから俺は、かづくんに変わったんだ？」

「火月くんじゃなんか変だとおもったの……だからかづくんに変更だよ」

「わかった」

（かづくん、この二週間の間が変わった）

みんな同じ事を考えていた。

ここまでされると嬉しいな。さすがに

ケーキを食べながら俺たちは今までの事を話していた。無論ロストギアの事は話していない。

「それで火月はどうだったんや？」

「結構楽しかったよ」

「それはよかった」

「地球もどるのか？」

「いや、まだ夏休みの宿題しないといけないしね」

「……俺もう終わったぞ」

「え!?!」

「私も」

「私もや」

はやてとフェイトと俺は夏休みの宿題はとっくの昔に終わっていた。

現在夏休み宿題をしていないのは、なのはただだ。

「お願い」

手を合わせながらフェイトとはやてに頼んでいた。

フェイトとはやては優しいので手伝って上げると言った。さすが友達

「フェイト俺先に地球に戻りたいんだけど……?」

「なんで」

「母さんが帰ってきてるかもしれないから」

「わかった。それじゃなのは、私火月を贈ってくるね」

「うん、まてね。かづくん」

「またな」

「おう」

俺はフェイトと外に出て転送魔法で地球に戻った。

「それじゃ火月またね」

「またな」

フエイトは再び管理局にもどった。

久しぶりの地球に俺は感動していた。だって今まで雪山だけ。

走って家に帰った。だけど何か変なんだよな。辺には誰もいない。

「ただいま」

返事がない。母さんいないのか？

リビングのドアを開けると料理が作ったまんまの状態で放置されていた。

母さんが帰ってきたのは間違えない。だけどいない……………。

妙に気になったので俺は家を飛び出し、商店街に向かった。

さらに商店街に着くと、その光景は

「なんで……………なんで……………誰もいないんだ!!」

どこにも人がいないのだ。店の中にも……………。

一体何が起きているんだ？

「ライト、これってもしかして」

「結界が貼られています」

「何時？」

「レディが転送してからです」

フェイトがいなくなったと同時に結界が貼られた？

考えた。答えがひとつだけ見えてきた。

「ライトセットアップ」

「yes」

俺は先にクロノに連絡をいれた。

「クロノか」

「どうした？」

「現在正体……の結…….……られている」

「なんだ？」

通信が届いてないのか？ 仕方ない。ここは俺一人で

どこを探しても人が一人もいない。

「どこだ！ ロストギア！ どこにいるんだ！」

「来たか……」

俺の目の前に現れたのは1週間前に現れたロストギアと名乗る者だ。

こいつは一体何者なんだ？

<なのは視点>

「終わったでなのはちゃん」

「私も終わった」

「こっちも終わったよなのは」

ふたりの御陰で宿題終わり。さすがだね。優等生のフェイトとはやて。

「ありがとうフェイトちゃん、はやてちゃん」

「いって」

「気にしないで」

その時、なのは達にクロノから連絡が入ってきた。

「あ！ クロノくん、どうしたの？」

「今すぐアースラに来てくれ」

「え？」

「はやてもフエイトも連れてくるんだ」

通信が切れ、不思議に思ったのはただけどアースラに向かった。

アースラに到着すると辺が騒がしかった。

「どうしたのクロノくん」

「現在地球に正体不明の結界が貼られている」

「なんなのそれ!？」

三人がモニターを見る。

「誰も中に入れないんだ。現在は中に入る火月に連絡をしているのだが届いていなんだ」

「「「え!？」」」

(かづくん、無茶はダメだよ)

<火月視点>

現在俺の目の前にはロギと名乗る者が立っている。

「どうして、俺のロストギアを狙う」

<なのは視点>

「クロノ艦長、向こうからの映像が送られています」

「なに？」

モニターをオンにして見る。

二人は会話している。

<火月視点>

「世界を手に入れるためだ」

「そんな事の為に……絶対に渡さない」

「何を言つか貴様こそ既に死んでいるくせに」

「……確かに俺は死んでる。だけど！ ロストギアの御陰で俺はここにいられる」

「だったらどうする？」

「ロストギアを全てぶっ壊す」

両手に銃を構え俺はダッシュした。

右手の銃口を敵に構え撃つ。簡単に弾かれる。

(こいつ強い。本当に……)

「その程度か？」

「cross mirageークロス・ミラージュ」

一発の弾丸から無数に別れる魔力弾。

「なに」

これが俺の完成たいのcross mirage。一発の魔力弾を
どンドン増やしながらか敵に命中する。

それがcross mirageだ。完成させるのに苦労したぜ。

煙とともに奴は

「どうだ？」

「きかなな」

「なに!？」

無傷で立っていた。

これは本気で戦わないと死ぬかも知れないな。またなのはに怒られ

るな。

でも、それでも戦わないと……。

敵は俺の方に手を向ける。

「ん？」

その手に魔力が集中され打ち出される。

この魔力の出来さ……over……Sは普通にある。

これがロストギアの力なのか？

違う、あれはあいつ自身の力。

「くっ！」

魔力の縦を全開で発動中。だけど押し出される。

「負けるかあっ！」

ライトを片腕で構え

「one brassiワン ブラス」

自分の魔力の盾に打ち込むことでガードをさらに強化

「掻き消える！」

ライトを『ソヴァイモード』にして切り裂く。

「それがどうした？」

「そんな！？ うわあっ」

魔力弾が俺の体に命中そのまま地面に叩きつけられる。火月は既に本気で戦っていたが敵はまだ半分の力しかだしていないと言っ。

「勝てない。それでも」

一気に空中に飛び敵『ロギ』に攻撃を再び開始する。ツヴァイモードで飛び込んで斬る。だけど簡単にガードされる。まるで自分の動きを見透かすように

「その程度で私を倒せると思うな。ふん、しかたない……これが私の本気だ」

魔力が手に集中される。火月の体は再び地面に叩きつけられて動けない。

(体が動かない)

「貴様を消した後でロストギアは回収する。消える。デモンズ・ブレイカー」

そこから黒い魔力の収束砲撃が俺に向けて発射された。

<なのは視点>

「かづくん……が……死んでる？」

モニターの映像から音声が流れ、衝撃的な事実を知るのはたち今にもなのはが飛び出しそうな勢いだ。

「一体どういうことや?」

「火月……」

そこにちょうど

「なのは! はやて! フェイト! クロノ艦長」

「ユーノ」

「ユーノくん」

泣きながらユーノ見つめるのは。
火月が死んでいるということを認められないのだ。当然と言えば当然だろう
そこでユーノも火月が死んでいるという事を聞かされた。

「火月、やっぱり話してなかったんだ」

「やっぱり……ってどういうこと? ねえ! ユーノくん」

「そうだ、ユーノどういうことだ?」

「クロノ艦長たちが言った事は確かです。火月は死んでいるはずなんです。」

「……………どういう……………」と？」

「なぜ、お前はわかる？」

なのはとクロノに質問されるユーノ。

ユーノは少しくらい顔をしながら話始めた。

「火月が小学生の時です。母親と買い物に向かっていたんですけど、ただで事故が起きた。火月がトラックにひかれ、もう死ぬ寸前でした。ただで偶然火月の前にはロストギアが落ちていた」

「……………」

「それとなんの関係が？」

「さつきも火月は言いましたけど……………火月のデバイスにはロストギアが入っています。そして、その御陰で火月は生きられています」

「じゃあ、デバイスのロストギアを敵が奪ったら……………」

「火月は……………死ぬ」

火月の秘密をしつたなのは、モニターにめがけて

「かづくん！ 逃げて！！」

「ダメです。通信繋がりません」

「・・・・・・・・火月」

「火月・・・・・・・・」

<火月視点>

辺り一面闇に包まれる。そこで過去の記憶が流れた。

『火月、お前にもいずれ守ってやりたいと思える人が現れる。
だから強くなって守りたい者を全て守れよ。それが父さんから
前のお願いだ』

「そつだよな父さん。俺は・・・・・・・・俺は・・・・・・・・守るだけ守って
死ねればそれでいいや。だからライト・・・・・・・・ファイナルモード」

「yes master」

ロギのデモンズ・ブレイカーは火月に直撃した。

「ふ、はははは俺の勝ちだ！・・・・・・・・なに!？」

下を見たロギの目には、無傷の状態で立っている火月。

そして彼の手には、まだ見たことない『ライト』の姿があった。

第13話 ロストギアの花(後書き)

次回 魔法少女リリカルなのはA S ' ライト 最終話 未来の為に
も生きて！

禁断の力を開放した火月。彼のデバイスは一体……
早いですね最終回。こままストライカーズに繋がります。
今だになのはたちの口調がおかしいと自分で思っんですけど……

魔法少女リリカルなのはStrikers rightです。
基本的漫画とアニメで行くんでよろしくです。それでは

最終話 未来の為に生きて（前書き）

次回からはストライカーズ

最終話 未来の為に生きて

煙の中から現れたのは、まだ観ぬデバイス（ライト）を持った加津佐の姿だった。

その姿は、黒い魔導服が白い魔導服になり、ライトはさらに形を変えてい。

「俺は……」

「くっ！ まだ隠していたか、だが私には勝てん！」

再び収束砲撃に移ったロギ。ただど……

「……いない。どこだ？」

「こっちだ」

火月は一瞬にしてロギの後ろに回り込み、『ファイナル・ツヴァイ』で切り裂く。

ファイナル・ツヴァイ。簡単に言うならツヴァイ・モード強化がたと言ったら簡単かもしれません。

「ぐはっ。お前を殺して手に入れる！」

火月の上から魔力の大きな塊が火月をめがけて、飛んできている。

「……」

火月はその場を動かそうとはしなかった。その逆で『ファイナル・V2』で破壊に向かった。ファイナル・V2も簡単に言うなら、なのはのレイジング・ハート、エクセリオンモードみたいな感じですよ。

「……………」

今だに無言。『ファイナル・V2』から発射されたのは、クロスドライブ・ブレイカー

ありえない大きさのクロスドライブ・ブレイカーだった。

火月が撃った収束砲撃が魔力の塊に激突。そのまま塊を破壊した。

「そんな馬鹿な！ この私が」

「終われせるぞ。ライト」

「yes master」

カートリッジが5個転送され、再び火月は収束砲撃の大勢に入った。本当に圧倒的な強さ。なぜ初めから使わなかったのか？ 少し時間をさかのぼります。

「火月くん、出撃」

「了解」

近くでガジェットが出たという情報はいり、俺たちは向かった。そこには、大量のガジェットたちが何かをしていた。

「火月、急いで破壊を」

「おう」

だけどガジェットの数があまりにも多すぎて

「くそっ」

「きゃ」

刹羅の部隊の一人が攻撃をくらい、そちらに気を全員がとられ
一気に畳み掛けられた。

「……………く……………そ。お……………は、守……………って、
決めたんだ!!」

「yes master」

とライトが答え、ライトの形が変わり魔導服も変わっていた。

「cross・mirage!!」

一発の魔力弾が無数に別れガジェットを次々と破壊していった。
ただとそこで事故が起きた。増えすぎたcross・mirage
の一発が刹羅のメンバーにあたった。
それを見た火月は

「うわぁああ!!」

そして、メンバーで直撃したのがアステリカだった。

だから火月は、この力は使わないと決めていた。

<なのは視点>

「なに……あれ？」

「火月……ファイナル・モード使ったんだ」

「ファイナルモード？」

ユーノと火月は色々と連絡をしていた。
質問されたことを全て話したユーノ。

「かづくんに……」

「だけど、圧倒的な力だ。今の火月なら負けない」

ユーノは確信をえてなのはたちに答えた。

<火月視点>

「これで終わりだ。クロスドライブ・ブレイカー!!」

どんどんロギが光に包まれいった。

「私はこれでは終わらんぞおっ!!」

そう言つてロギは消えていった。

ロギを倒すと結界が壊れた。

地上に降りた火月は、自分のデバイスからロストギアを抜き

「ライト、今までありがと。お別れだ」

「いいえ、私は当然の事をしたまです」

ライトを地面に置き、少し火月は歩いた。

「この何ヶ月色々な事があつたよな俺」

ロストギアに向けて喋り始めた。

「なのはと出会つてフェイトとはやてと出会い。色々な人と出会えた。感謝してるロストギア」

火月のもうかた方の腕にはライトツヴァイの状態がまだ残っていた。

「だけど……俺の役目は終わった。そうだろ父さん」

ロストギアを地面に置いた火月は、ツヴァイを振り上げ

「さよなら。みんな……母さん」

そのまま火月は自分のロストギアにツヴァイを振り落とす。

<なのは視点>

「結界消滅」

火月がロギを倒したことで結界が壊れ

「火月はどうだ？」

クロノがそう言うと

「無事です」

向こうから音声が聞こえた。

火月の声だろう

『ライト、今までありがとう。お別れだ』

その言葉を聞いたなのはたちは転送ポータルに向かい、なのはたちは地球に降りた。

レイジングハートたちをセットアップし、重つきり加速した。

（かづくん、まだかづくんの誕生日のお祝いまだだよ）

<火月視点>

振り下ろす火月だけど

「だめー!!」

と右からなのはが突撃してきた。。

そのまま俺の体の上に落下したなのは

「痛い」

「かづくん、死んじゃだめだよ。」

火月は泣きながらなのはに言った。

「俺の・・・役目は終わった。だから行かなくちゃ」

「どうして!! そんなことを言うの!? なんで生きようとしな
いの」

「生きようとしたさ! だけど・・・だけど! いつの間にか
お前たちの事が大事になっていたんだ。
だから俺は・・・」

「私達の為って言うなら」

そこでフェイトとはやてがやってきて。

「未来の為に」

「生きて!! それが私たちからのお願いだよかづくん」

泣きながらなのはたちは俺に言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかった」

「ほんと?」

「本当か？」

「本当に？」

「同じ事を言つな！！ 本当だ」

俺はそう答えた。

俺はなのはたちの方に顔を向けて、笑顔をした。

そして、戦いが終わり現在俺の家前

「かつくん」

「ああ」

ドアを開け家に入る。自分の家なのに緊張する。

リビングのドアを開けそこには……………

「お帰り」

「ただいま。それと……………」

「おじゃましまーす」

と三人の女の子が入ってきた。

「初めまして、高町 なのはです」

「フェイト T ハラオウンです」

「八神 はやてです」

「俺の友達」

多分火月の母さんも思っただろう。火月が女の子の友達がいるなんてしかも美人三人。無論火月自信もありえないと思っっているだろう。自己紹介が終わり

「それじゃかづくん、誕生日」

「」「」「おめでとう」「」「」

と色々な人たちが俺を祝ってくれた。

現在俺の家の庭、家の中だと人数が多過ぎる。だって、なのは、フェイト、はやて、クロノ、シャーリー、リンディ、エイミィさん、なのはの両親もきていた。こんなに家に人がきたの初めて

「どうも」

みんなで食事 시작했다。この場になぜクロノとリンディさんがいるか、俺の未来を聞くためにきた。

「じゅめん、俺ちょっとトイレ」

火月はそう言ってベランダからリビングに入り扉を閉じる。

「じめん……なのは」

自分の部屋に手紙を置いて家を出た。

<なのは視点>

それから30分立つても火月は戻ってこなかった。

「火月、遅いな」

はやてがそれを言うと

「かづくんの部屋に行こう」

なのはが言い出した。

「賛成」

はやてとフェイトものりだった。

楽しんだろうな。だけど悲劇はつづく。

なのはが先に俺の部屋にはいり

「かづくん、いる？」

辺りを見渡してもいない。だけど

「あれ……」

火月の机の上に手紙が置いてあった。

なのははそれを開き

「!？」

ボタンとドアを開けてなのはは飛び出した。

「なのはは」

「なのはちゃん、どこに行くんや？」

玄関のドアを開けてどこかに行った。

フェイトとはやても部屋に入ると手紙が落ちていた。
読み始めたフェイト

『みんなへ、一人で行くことを許して欲しい。

あの時はわかった言ったけど、俺はやっぱ行きます。4年前、本当なら死んでる俺がここにいるのはおかしい。

自分の運命を捻じ曲げた俺は、ここにいちゃいけない。だから、行きます。

でも、心残りはある。まだやってないゲームとか買い物とか、それになのは、フェイト、はやてたちともっといたかった。

本当にいつの間にか俺の心の支えになっていた。ありがとう色々な人に出会えてよかった。ユーノ、クロノ、リンディさん、エイミーさん、シャリーさん会えて本当によかった。

この何ヶ月楽しかったな。ありがとうな。本当になのはには感謝してる

最後に母さんへ、一人にするけどごめんなさい。千川 火月

通知　なのは、フェイト、はやて、幸せになれよ』

「母さん!!」

「火月のお母さん!!」

階段を駆け下りたフェイトとはやて手紙をリンディさんたちに渡す。

「そんな……」

「火月くん」

「どこかに行く心遣りはないですか？」

「……桜公園」

「え？」

その名前に聞き覚えがあるような素振りを見せたなのは母。

「何か知ってるんですか？」

「ええ、もう10年前になるかしら、なのはが確か桜公園で男の子に出会って遊んだって言ったの」

それを聞いた火月の母も

「私も同じ話を火月から聞きました。火月も桜公園で女の子に出会って遊んだって……」

「それって……」

二人は小さい頃に出会っていた。

「多分桜公園にいるはずですよ」

火月の母は言い切った。

それを聞いたフェイトはなのはに連絡をいれた。

<なのは視点>

「うん、え！？ わかったありがとうフェイトちゃん」

なのはは、桜公園に向かった。

(かづくん、あの時男の子はかづくんなの？)

<火月視点>

現在桜公園のベンチに座って辺りを見渡している。

「綺麗だな」

そこから見る街の景色は、本当に綺麗だった。

「怒るだろうな。ライト」

「なんでしょっ」

「もしなのはが来ら、謝っといてくれな」

「……………はい」

俺は自分のロストギアを割った。

霞む視線の先に一人の少女がこちらに向かって来ているのが見えた。

<なのは視点>

「かづくん!!」

桜公園に着いたなのは。その視線の先には火月が倒れている姿。走って火月に駆け寄るなのは

「しっかりして」

「……………な……………の……………は」

「うん。そっだよ。私だよ」

「……………め……………ん」

「そんなこといいから、それよりあの時の男の子ってかづくんなの?」

火月は少し驚いた顔をした。

あの時の女の子なのはだったんだ。よかったまた会えて

「な……の……は……お……たち……
の……す……だ」

火月の手がなのはの顔から落ちて地面に着く。
体を揺さぶるなのは。

「!? ねえ、かづくん! かづくん!」

その場に到着したフェイトたち、なのはに近づく

「なのは……」

「なのはちゃん」

涙を流し始めるなのは。

「どうして? どうして、かづくんは私の前からいなくなるの?
あの時もまた一緒に遊ぼって約束したのに……どうして?」

一人で火月に話をかけるなのは。

「私あの時また桜公園に行ったんだよ。また遊びたくて、でも、い
なかった。

あの時の子がかづくんなら私との約束守ってよ。誰でもいいからか
づくんを助けて!」

「……………なのは」

「……………なのはちゃん」

その思いに答えるかのように火月が壊したロストギアが光だした。急に光だし空に飛び上がるロストギア。

「……………なに？」

『どうしてそこまでその少年にこだわるの？』

ロストギアが話始めた。

「……………え？」

『君たちのそこにいる少年は、なんの関係もない。どうしてそこまでその少年にこだわる』

フェイトとはやては何も言わなかった。というより喋れなかった。急にロストギアが動き喋り出しているから、それに答えたのは……
……なのはだった。

「そんなの簡単だよ。友達だから、大切な友達だから!!」

『……………それが答えか……………ならその証拠を見せてもらおう。』

それを見せれば、その少年を助けてやるっ』

「本当に!?!?」

『だがその証拠という物は、我らにに貴様たちの全力魔力を全て』
そんな事はできない。ロストギアが壊れれば千川 火月は死ぬと思
ったフェイトとはやて

「……………私……………やるよフェイトちゃん、はやてちゃん」

「なのは!?!」

「本気なの？ なのはちゃん」

「うん。かづくんが助かるなら私はやるよ。いつだって、どんな時
だって助ける!?!」

なのはは直ぐにレイジングハートをセットアップし、収束砲撃に移
る。

それを見たフェイトとはやても覚悟を決めた。

「いくよバルディッシュ」

「yes master」

「リーンフォース」

「はい。ユニゾンイン」

「フェイトちゃん、はやてちゃん」

「私らも火月と一緒にいたいからな」

「うん、私も」

全員が最大魔力の攻撃にはいる。
それと同時にクロノたちがその場に到着した。

「お前ら一体何をやっているんだ？」

「かづくんを助ける」

下を見たクロノは、火月が倒れていることに築き。

「………結界」

ユーノにそれをいうとユーノは直ぐに結界を貼った。

「ありがとうクロノくん、ユーノくん」

深呼吸をしたなのはたちは

「いくよー!!」

「うん」

「全力全開！ スターライト」

「ラグナロク」

「プラズマ」

「ブレイカー!!!」

「ザンバー!!」

二つの収束砲撃と最大出力の剣がロストギアにぶつかる。
それと同時にクロノたちも魔力をロストギアに向けて放つ。

「かづくん、目を開けて!!」

<夢の中>

「……………死ぬのって怖いな」

「辺り一面真っ暗だ」

「もう、あの笑顔を見れないのか……………ま、いいか」

どンドン下に沈んで行く火月

「え?」

急に手を誰かに握られた。

「誰?」

「私はロスト」

「僕はギア」

「ロストギア?」

「うん」

目の前に現れたのはロストギアだった。
こいつらが本当のロストギアと思った火月。

「どつしてここに？」

「君を迎えにきた」

「君助ける為にみんな頑張ってます」

それを見せられる火月。

「でも、僕が戻ればまた……」

「それはみんなで乗り越えればいいよ」

「そうだよ」

「でも……」

「僕らが君を支えるから」

「だから行って」

「……いいのかな俺生きて？」

「いいんだよ」

「うん」

「……………わかった俺いくよ」

「お願いがあるんだ？」

「なに」

「宇宙空間に巨大なロストギアがあるそれを壊して欲しいんだ」

「……………ああ。それじゃな」

「バイバイ」

「ああ」

光に包まれ目を覚ました。

そこには涙を流しながら俺のそばにいるのはたちの姿……………

「あれ……………ここ、地獄か？」

「かづくん!？」

泣きながら抱きつくのは。

他にもフェイトやはやても……………なぜみんないるんだ？

「少しどいてくれなのは。俺やらないといけい仕事がある」

「なに?」

「お前たちは何もしくなくていい。ライト」

「yes master」

火月は直ぐに装着し、収束砲撃の大勢に入った。
無論、V2モードでの

「かづくん？ 何してるの!？」

「いいから……」

それを見守るのは、フェイト、はやて、クロノ、火月の母、なのは母、なのは父、ユーノ、シャーリー
リンデイさん、みんなが火月を見守っている。

「シューティングスター」

一気に火月のライトに魔力が集まり

「何この魔力の色」

七色に光ながら火月の辺に集まってくる。
みんなの魔力が火月の中で流れている。それが

「ブレイカー!!!」

その一直線に伸びる火月の新技『シューティングスターブレイカー』
それは宇宙にまで伸び、ロストとギアが言っていたロストギアを破
壊した。

それを見たのはたちの顔は

「綺麗」

流星みたいに落ちていくロストギア。

「……ありがとな。みんな」

「うんうん。当然の事をしたままでよ」

「「そっだよ火月」」

「うん」

火月の母が火月に近づく。

「か・・あさん、ごめん」

思いつきり抱きしめられた火月。

「貴方がいなくなったら私には何も残らなくなる」

「ごめん。もう大丈夫だから」

「……ええ」

「それじゃ帰るか？」

「うん」

みんなが火月の返事に答えた。

それから1年の月日が流れ、俺は中学を卒業した。
……俺も驚いたなぜなら俺は転校したんだ。
なのはたちの学校に……。あそこは確か女子高校だったはずなのに
そこで俺は卒業した。現在管理局だ。

「……………うん」

「どうしたの火月？」

「ん？ いや、フェイトの仕事やってみたйкаなあって思ってさ」

「そうなんだ……………」

俺たちが二人で話しているとなのはたちもやってきた。

「お待たせかづくん、フェイトちゃん」

「ホンマにお待たせな」

「気にするな」

現在海辺を見ながら話している。つっても今いる場所は訓練場なん
だけど

俺たち四人は現在デバイスをセット中である。これからの事を話し
ていた。

「それじゃかづくんは、執務官になるの？」

「なるけど……………一等空尉の仕事も無論やる」

「そうなるか二つともやることになるぞ？」

「二つともやる。それじゃ始めるか」

「うん」「うん」

なのは、フェイト、はやて、ここでやる最後の訓練だ。
今まで色々な事があつたけど一番こいつらと入るのが落ち着く。

「行くぞー!!」

「うん」「全力全開」「うん」

「スターライト」

「ラグナロク」

「プラズマザンバ」

「クロスドライブ」

「うん」「ブレイカー!!!」「うん」

俺たち四人の収束砲撃がぶつかると同時に俺は砲撃を切り、空高く舞った。

「それじゃな、なのは、はやて」

「うん。またね。フェイトちゃん、かづくん」

「またな。火月、フェイトちゃん」

俺たち四人はそれぞれの道に向かって飛んだ。

最終話 未来の為に生きて（後書き）

ここで一旦終わりです。

この次回作は、OVAで少しずつ更新して行きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5297u/>

魔法少女リリカルなのはAs' ライト

2011年10月13日17時50分発行